ZINE・16 ― 2018・初夏

中断していた古い「年表」を書き継ぐ―〈前註〉

――〈生のサンジカ〉というキイワードへの途のり

生・労働・運動ネット　富山

刊行物案内

ＺＩＮＥ・２　2014・秋
　　〈フクシマへ〉折り返すことにむけて
ＺＩＮＥ・３　2015・春
　　さよなら　私の死者・たち――「困民丸」の小さな歩みから
ＺＩＮＥ・４　2015・夏
　　「敗戦 / 戦後 70 年」は私・たちの〈問い〉か
　　――「ラウンドテーブル・2014」での論議から
ＺＩＮＥ・5　2015・秋
　　アンラーニング・2015　問いをもちよる
　　――施設で考えた中途半端な支援と労働
ＺＩＮＥ・７　2016・夏
　　私・たちの来歴
ＺＩＮＥ・８　2016・夏
　　「階級」という問題の来歴：資料リスト　00 年代から現在
ＺＩＮＥ・9　2016・夏
　　我田引用「ヤサグレたちの街頭」考
ＺＩＮＥ・10　2016・秋
　　NO WAR, BUT UNDERCLASS WAR ！
　　アンダークラスは〈横謀〉する
　　ON THE STREET ／ IN THE NIGHT @ TOYAMA
ＺＩＮＥ・12　2017 年・冬
　　復刊　2008 年パンフレット
　　「米騒動 90 年」:「米騒動」から何を受け取るのか
ＺＩＮＥ・13　2017 年・冬
　　復刊　2009 年発行「ニューズレター」
　　〈背後〉の未来が現在と出会うとき――浦島太郎物語
ＺＩＮＥ・14　2018・春
　　「熊谷 6 人殺害事件」のためのノート
ＺＩＮＥ・15　2018・春
　　「米騒動」100 年　プレ企画：〈68 年〉から 50 年
ＺＩＮＥ・15　別冊　2018・春
　　「米騒動」100 年　プレ企画：〈68 年〉から 50 年　資料集

中断していた古い「年表」を書き継ぐ—〈前註〉
——〈生のサンジカ〉というキイワードへの途のり

〈はじめに〉

2018年——「米騒動」から100年。私・たちはこの4月から10月にかけて、「『米騒動』100年プロジェクト：『米騒動』を抱きしめて——「耳を澄まそう！『米騒動』のエコーが、 『じゃなかしゃばが欲しかよ』の声が・・・聞こえる」を企画している。

それは、「米騒動」から100年にわたって、この列島の底部に刻みこまれてきた民衆の軌跡、民衆がその身体をはって、拓こうとしてきたみずからの「生」の集団的・共同的構成の営みの軌跡をたどることの試みに、他ならない。

強権を持って進められた近代という時間がこの列島に穿った亀裂の底から、民衆が身をよじるようにして刻んできた、自らの〈生〉をどのようなひととひととの間の〈組み＝合い〉において構成するかをめぐる希求——〈生のサンジカ〉への希求の軌跡を捉え出し、その軌跡のその〈先〉へ 私・たちはどのような営みを創り出していけるのか？

「米騒動」から100年、問われているのは、私・たち自身の社会的想像力をどのように屹立させるかという〈問い〉である。——〈生のサンジカ〉とは、今まさに屹立させるべき社会的想像力を駆動させる私・たちのキイワードである。

個人史	68年　富山へ	大学闘争の〈極私〉的終焉
	大学闘争＝大学教員闘争は可能か	刑事弾圧 「新しい社会運動」への親和と異和 日カバ労組との出会い・「遊学塾」結成 「地域を拓くシンポジウム運動」 反原発・反学校管理運動 反公害・反開発地域住民運動の衝撃 党派でもなく個別運動体でもない運動者集団を 大学闘争〈極私〉的終焉
	大学闘争の終息	新左翼の拡散
「同時代」史へ		運動の分岐（※） （※） 国際連帯運動 反差別諸解放闘争運動（在日／部落／沖縄／アイヌ／女性／「障害」者） 反公害・反開発地域住民闘争支援（三里塚・水俣等） 武装闘争・爆弾闘争 「内ゲバ」（「戦争」）
	75・5東アジア反日武装戦線一斉逮捕 74・8三菱重工爆破 72・5狭山事件差別裁判糾弾闘争 72・2連合赤軍浅間山荘銃撃戦 71・11沖縄「返還協定」批准阻止闘争 71・11「ウーマンリブ大会　性差別告発」 70・7・7華青闘新左翼批判 70・6反安保6月闘争 69・11「政治決戦」―佐藤訪米阻止闘争 この頃左翼分裂少数派組合の結成続く もうひとつの〈68〉年 68・2　金嬉老事件　68・10永山則夫事件	
社会運動の問題史	〈６８〉 急進化の純化と古典的範型の解体との緊張 直接行動　党派×全共闘運動　大学闘争－学生反乱 全国政治闘争 vs「社会」闘争の自立 決戦主義 vs 行動的快楽主義	ポスト〈６８〉 残存する急進化 範型それじたいの解体 党派でもなく個別運動体でもない、〈生〉の新しいスタイルによる運動者集団

86	96	06
集団形成	〈H・Y〉の死	ひとりの〈浦島太郎〉として
（87→91→95→96・・） 全体化作用の創出へ向けて）地域政治への介入 社会運動の構造化へ向けて（社会運動に対する い生のスタイルの創造を 運動者集団に深度を―「創造的失業者」―新し	抗―その限界 地方自治体のネオリベラル的再編への批判・抵 こまで異星人たり得るか」 地域政治への介入の継続（97→99→03）―「ど	すことへ 保障されざる者の〈**生・労働・運動**〉を創り出 ネオリベラリズム批判の模索
「新しい社会運動」 という枠組み	「社会運動」の すみわけと制度化	反ネオリベ 反グローバリゼーション. の模索
94メキシコ「サパティスタ」の蜂起 80年代末「既存社会主義圏」解体 リゼーションの展開 新自由主義（ネオリベラリズム）にもとづくグローバ 70年代末～80年代半ばサッチャー／レーガン／中曽根 （サービス・情報化／消費過程の包摂） 70年代後半～80年代にかけて資本主義の変容 （＋エコロジー／反原発／反学校管理など） 「新しい社会運動」への親和と異和	03「イラク反戦運動の世界的展開」 02「イラク戦争」―日本「参戦」 01アメリカ「同時多発テロ」 形成の加速度的展開 90年代後半からネオリベラリズム「構造改革」・「戦争国家」 ムの世界的前進　01世界社会フォーラム始まる 99アメリカ「シアトルの乱」―反ネオリベ／グローバリズ	反Ｇ８へ **「生・労働・運動」群の開花** 反貧困ネットワークの形成 「プレカリアート」／「フリーター」運動の胎動
ポスト〈６８〉をこえて		
新しい「社会運動」の「制度」化	新しい範型の模索	
「新しい社会運動」への親和と異和 「社会的（工場）労働者運動」は可能か？	「新しい社会運動」の NPO・NGO 化 社会運動の構造化へ向けて地域政治への介入	反ネオリベ/グローバリズム―〈生・労働・運動〉の模索

〈前註・1〉

ここに一枚の古い「年表」がある。これは、今から10年前に、私・たちが「〈68〉年」から40年――〈背後〉の未来が現在と出会うとき」という企画を進めた折りに、メンバーの一人が〈68〉年からのあゆみを語る資料として用意したものである。(＊)

「〈68〉年から50年」にあたる今、私・たちとしては、この「年表」を私・たち自身の「年表」として書き継ぎたいのだが、「〈68〉年から50年」でもあるが、「『米騒動』から100年」でもあることに向けてのプロジェクトの準備に忙しく、そのためのゆとりがもてない。

以下は、この『年表』の2006年以後の空白を埋めるべく、それ以後の私・たちの歩みを書き継ぐための〈前註〉であり、その内実は折々の私・たちの営みの記録の集積である。

（＊）その折りの企画については『ZINE・13』参照。

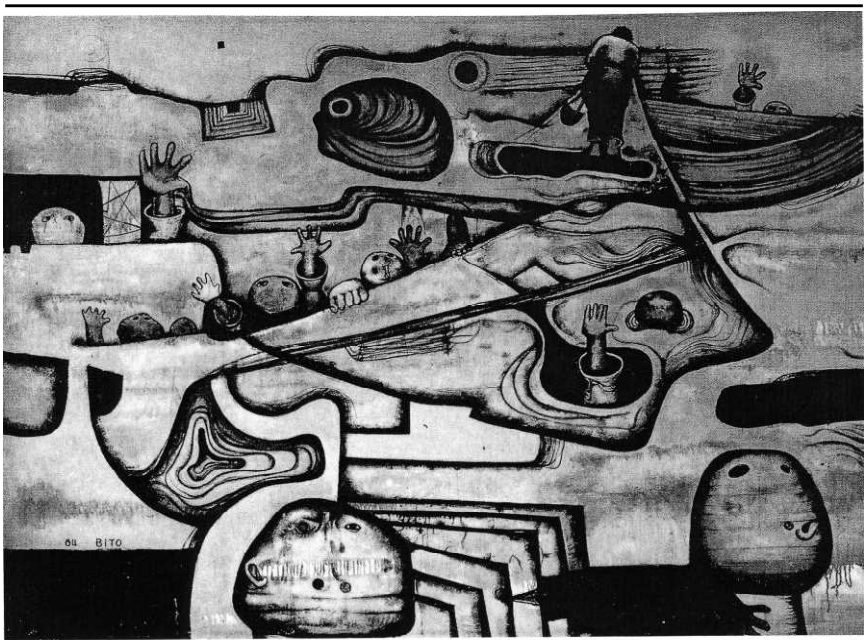
〈前註・2〉

――小さな「生・労働・運動」の試み

ｉ．2007年：「もうたくさんだ！」大行進スタート

こちら「もうたくさんだ！」大行進

応答願います



（尾藤　豊　作品集「失われた大地」から）

2007年4月28日、私・たちは、「もうたくさんだ！大行進」をスタートさせた。

私・たちの試みは、極めてささやかなものであり、東京・大阪などでの営みに相呼応するなどとは、言えるものではない。

しかし、私・たちの思いは深く、「もうたくさんだ！大行進」／「生の保障」研究団を一対（つい）のものとして進めることへ、さらにふみこんでいこうとしている。

――以下は、私・たちの４・２８「大行進」についての小さな「記録」である。

〈発端〉

●「もうたくさんだ！大行進」――その発端は、この悪しき時代を生きる私・たちの身体のきしみが胚胎する、一つの妄想だった。――――

今年の２月１９日の朝、「新聞」をひらくと、道路いっぱいに参加者が走る光景の「写真」と「東京マラソン　首都大封鎖　３万人快走」という「見出し」が私の目に飛び込んできた。

それを目にしたとたんに、私の身体の中に、「『おまけ組』大行進　首都大封鎖　３万人暴走」という妄想が、大きくふくらんできた。いかなる妄想であれ、妄想は、肥大性こそがその本質であるとはいえ、その妄想の肥大の速度と大きさは、私自身を驚かせるものだった。――「東京マラソン」の場合は、東京都と警視庁による「市民マラソン」(というセレモニー)の「成功」に向けての「交通規制」の結果、「首都大封鎖」となったのはいうまでもない。だが、わが身体の妄想の場合は、「大行進」それじたいが「交通マヒ」を引き起こし、その連鎖によって「首都大封鎖」が生起するのだ。

ちなみに「おまけ組」というのは、この近年よく耳にするようになった例の「勝ち組」／「負け組」というふざけた人の分け方に対して、その分類に入れてもらえず、「おまけ」で生きさせてやっているのだといわれ、だからこそ逆に、「負け組」にわざわざ「お」をつけて、丁寧に読んでいただかなくてもけっこう、そういう分類じたいを打ち壊してやるぞと、思う者・たちのことで、それじたいが、わが身体の妄想によるネーミングである。

「『おまけ組』大行進　首都大封鎖　３万人暴走」――このわが身体がはらんだ妄想は、わが身体の深みにわだかまる記憶――街路／〈街頭〉の「浸透膜」が破られ、〈街頭〉が励起(スウィング)した遠い〈出来事〉の記憶にもとづく、ノスタルジックな妄想にすぎないのではないか？そのようなノスタルジーから、わが身体が解き放たれていないこととは別に、この妄想へ向けて、わが身体を現に押しているものが、確かにあるのではないか？その日の朝から数日の間、わが身体は、この自問自答にゆれ続けた。

●「もうたくさんだ！大行進」――この妄想は、この悪しき時代にあらがおうときしむわが身体をそこへ向かって押すものがあってこそのものだ。――――

この悪しき時代の中での「社会なき社会」にほんろうされ、「生の保障」の破壊によって、その生の解体に追いつめられて「路頭」に迷う者・たちの軌跡の累積が「路頭」の〈街頭〉への転化となって逆転し、〈街頭〉が「スウィング」する予兆を、私の身体は、確かに感知していたのだ。

こうした予兆が私の身体を押している、というよりはむしろ、こうした予兆の西方での表現に相呼応し、この列島社会のいくつかの地点で生起し始めている、この予兆を体現する〈生・労働・運動〉の胎動が、私の身体もまたそのように生きたがっているというように、押しているからこそ、わが身体は、この妄想をやみがたくはらんだのだ。――〈生・労働・運動〉――それは、この悪しき時代の「社会なき社会」によって「生の保障」の破壊へ向けて、重層的に決定される〈生〉が、〈労働〉が、〈運動〉が、それにあらがい、「生が労働になる」・「生が運動になる」〈註〉というように〈生・労働・運動〉を構成する行動の群れのことである。わが妄想からやや性急にいえば、この名付けようもなく、規定しがたい行動の群れは、すでにふれたように「路頭」の〈街頭〉への転化が惹起する〈街頭〉の励起(スウィング)の予兆なのだが、その励起(スウィング)が一定の強度をもつにいたるとき、それらの行動の群れは、遠く〈街頭〉を生き／行きぬこうとする欲求の噴出――「首都大封鎖　３万人暴走」というように――の導火線となるポテンシャルを胎んでいるように、見える。いいかえれば、それは、その記憶が私の身体の深みにわだかまる遠い〈出来事〉のポテンシャルをあちら側へ「反転」させてきたこの悪しき時代の推力(ネオリベラリズム／グローバリズム)を、こちら側へ逆「反転」させるベクトルを胎んでいるのだ。

「もうたくさんだ！大行進」――数日間、このわが身体の妄想について自問自答にゆれた後、私は、この妄想を分有してもらうことに向けて、動き出したのだった。その自問自答を決して手放すまいと思いながら。

〈註〉　渋谷望「〈生〉が運動になるとき」上・下(「図書新聞」07.3.27・4.3)参照。これは、Ｐ．ヴィルノ「マルチチュードの文法」の「書評」である。

〈準備〉

「もうたくさんだ！大行進」をこの富山で実現しようと、初めての呼びかけ人会が開かれたのは、春まだ浅い３月１４日、この日を含めて４回の呼びかけ人会を重ねた。

それぞれが社会的な「問題」に取り組んできた人が、呼びかけ人会に、加わっているとはいえ、単一の「問題」をめぐっての運動の経験は豊富でも、その枠を超えての行動となると、実際のところほとんどの人にそんな経験はない。

ヨーロッパ各地での「ユーロメーデー」の行動や韓国の「障害」者の闘いが、ヒントになるのではと、４月１４日、プレ企画として、「社会運動ドキュメンタリー上映会」を行った。

上映したのは、「バスに乗ろう」（02年　パク・ジョンピル監督）と「プレカリティ」（04年　イタリア・オランダの自主メデイア共同制作）の2本である。

「バスに乗ろう」は、韓国の公共交通システムのあり方に抗議し、「移動権」の保障を求める韓国の「障害」者の闘いの報告であった。

「プレカリティ」は、ヨーロッパ各地での「プレカリアート」(不安定な＋プロレタリアートの造語)を自称する人々の直接行動の記録だ。スーパーマーケットや巨大書店で、音楽入りで陽気に行われた型破りな行動を、彼らの側の視線で映したものであった。

上映された映像はどれも、刺激的だったけど、どう参考にしていいのかというとまどいの声もあったが、ともかくこれまでの労働運動や既成左翼の行動の枠が軽々と超えられていく様子は、映像を見たものに、いろんなイメージを喚起する力を間違いなく持っていた。しかし、イメージは喚起されても、それを具体化するのはやはり難しい。

その後の打ち合わせでも、スローガンのタイトルはすんなりとは決まらなかった。一週間前にようやく、「『もうたくさんだ！』大行進――すべての者に無条件で『基本所得(ベーシツクインカム)』を！」と大書した横断幕や「もうたくさんだ!!「自己責任」」などと書いた６本ののぼり旗が完成した。

持ち物は決まったのだが、参加者の服装をどうするのかということで、「ゼッケンをつけよう」とか、「そんなものは古い」などと意見が交わされ、色とりどりのビニール袋にカラースプレーで着色し、そのビニール袋から頭と手を出して自由に動けるポンチョのような服を作った。

その服をポンチョのように着るとなんだか自分がゴミ袋のゴミのような気分がした。素材が軽いので身動きは楽々としていた。ともかく、これで周囲の目に訴える表現はとりあえず決まった。

次に耳に訴える表現として、スローガンを繰り返すだけではなく、歌を歌ってはどうかと言う意見をもとに、まず、明るい曲風の「真田隊マーチ」（福田善之「「真田風雲録」の劇中歌・林光作曲）の替え歌をみんなで歌うことにした。また、明るい曲ばかりではなく、もう少し力強くしっかりした曲も歌いたいということで自分たちで作詞・作曲をした「ネズミ組見参」を歌うことにした。この2つの曲をそれぞれ毎日の仕事を終えてから、アパートの一室で練習した。録音してＣＤにした。

最後に準備したのが、このＣＤやスローガンをラジカセやメガホンを通じて流すだけでは音が小さい、そこで、１０年以上使っていなかったスピーカーやアンプを軽四車に装着することであった。そして、当日メーデー会場でまくビラも２０００枚を印刷して、当日を迎えた。

「 もうたくさんだ！」大行進

――「窮鼠(追いつめられたネズミ)」の乱の始まりへ

参加される人は、4月28日(土)8時45分、富山市総合体育館南側出入口（いたち川側）に集合して下さい。

「雇用」は不安定、「福祉」は不充分どころではなく、大きくゆれる生きることを支える「社会的きずな」。生活は「貧困」に押しつぶされ、存在そのものが「切り捨て」られ、「排除」されそうになっている。しかも、まわりからは「それは全て『自己責任』だ」と、きめつけられる。　私たちの身体は、日ごとに、「もうたくさんだ！」・「もうがまんできない！」と叫んでアバレタイという思いで、染め上げられています。

「もうたくさんだ！」・「もうがまんできない！」――〈なに〉についてそう思うのかは、私とあなたとで、同じでないかもしれません。それでも、それを〈声〉にしたい、〈叫び〉にしたい、身体全体であらわしたい、そのことで「私ハココニ生キテイル」と示したいということでは、同じではないか、と思います。

そこで始めます。５月１日は、「労働者の祭典(メーデー)」です。（今年は４月28日(土)）この日・この機会に「こちら　『もうたくさんだ！』大行進、応答願います」と、「大行進」しながら、この社会に「ナメラレッパナシデタマルカ」と〈発信〉することを始めます。例えば次のように**もうたくさんだ！「自己責任」論　私を自由に生きさせろ！。**あなたも、あなたが「もうたくさんだ！」「もうがまんできない！」と思う〈こと・もの〉をもって参加しませんか?

ちなみに、ここで「私たち」と言っているのは、「『窮鼠』(追いつめられたネズミ」組のことで、この「大行進」は、「窮鼠」、猫ならぬ犬を、はむ「乱」の始まりです。

「『もうたくさんだ！』大行進」と「生の保障研究団」とを一対のものとして、進めることを計画しています

「**生の保障研究団**」――それぞれの人が「もうたくさんだ！もうがまんできない」と思う〈こと・もの〉は、いろいろでしょう。しかし、それらの多様な〈こと・もの〉をつらぬく思いのひとつは、きっと「私を自由に生きさせろ！――生の無条件の保障を！」というテーマに集約できるだろう、と思います。このテーマを多様な角度から「学習／調査／研究」すること、それが「研究団」です。

その活動を通じて、一方で「生の保障」どころか、私たちをその枠外に押し出す「社会的排除」の実態を追及・監視する「**社会的排除監視団**」、他方でその実態を批判することから、さらに一歩踏みだして「生の保障」の実現に向けて「**『生の保障』要求者組合**」を立ち上げることを、めざします。

（当日配布のビラ）

〈「生の保障」研究団のスタートへ向けて〉

●すでに「もうたくさんだ！大行進」の「呼びかけ」でもふれたように、私・たちは「大行進」と「生の保障」研究団の営みとを一対(いっつい)のものとして、進めることを企てている。

「大行進」が、それを試みる者・たちの「生の保障」に関わる何らかの抗議／批判／要求の表現であることは、ここで改めて述べ立てるまでもないだろう。それらの抗議／批判／要求が単純に統一できるわけでも、統一してよいわけでもなく、相互に背反／矛盾／齟齬しあうものであることもあり得るし、当然のこととしてそれらの底にあるそれぞれの者・たちの「生の保障」についての認識に差異があることも、あらためていうまでもないだろう。問題は、この悪しき時代において進行する「生の保障」の破壊が、そうした「生の保障」についての認識の差異を極めて目的意識的に「悪用」し、人々の「社会的きずな」の分断（「社会なき社会」）を画策するものとして進行しているが故に、私・たちは、自らの「生の保障」の絶えざる再＝定義を試みることによって、それぞれの者・たちの認識の差異を、不断にのりこえることに努めなければならない、ということであるだろう。

私・たちは、自らの「生の保障」についての視野が極めて狭く、視野からこぼれ落ちる課題／見落としている発想／たとえ小さな芽であろうと見つけ出していない要求があることに、自覚的でなければならないだろう。――「生の保障」研究団は、このような意味での「生の保障」の再＝定義をその核心に置き、「大行進」との往復を進める「研究アクティヴィズム」とでも言うべき営みでありたい、と思う。

とりわけ、私・たちの遠近法が、この１０年あまりの時間の中で、この列島社会における「生の保障」の破壊の進行が、「圧縮近代」ならぬ「圧縮ネオリベラリズム」によって画策されてきたことに、ほんろうされ、混乱と錯誤の内にあることを、私・たちはよくわきまえなければならない。私・たちの遠近法それじたいの変革とそれにもとづく「生の保障」の再＝定義が、「生の保障」の破壊を不可視化する強圧(「自己責任」論!!)に抗い、その破壊が幾重にも折り重なって「社会なき社会」の「なき」の谷間に追いつめられ、〈声〉をあげることもかなわぬ人・人にも届くものであろうとすることは、私・たちの緊急の課題であるだろう。

●そうであれば、私・たちの「生の保障」の再＝定義は、この「社会なき社会」の〈むこう〉への予兆（予望？）を提示し、これまでの「生の保障」の歴史的水準を攪乱させる問題喚起力を持ち、「もはやない」地平から「まだない」地平への媒介となりうるような想像力の強度をもたなければならず、その意味において途方もない／とてつもない私・たち側からのいわば「社会契約」とでもいうべきものの提示に、連なるものでありたい。〈註〉

例えば、「雇用の不安定－安定」／「社会保障・社会福祉の縮減－拡大」／「社会的底辺層の排除－包摂」／「『ポスト福祉国家』＝『福祉国家』のネオリベラリズム的改編―『第３の道』的修正」――このような二項対立の枠の外で、前項に追いつめられて後項へといった受動性を否定する能動性において、私・たちの「生の保障」の再＝定義は始まるだろうし、それは、私・たちの「生の自律／生の自己＝共同価値化」への希求に染め上げられたものになるだろう。――この希求とは、この「通信」の冒頭の「発端」の部分でふれたことに即していえば、「路頭」の〈街頭〉への転化→〈街頭〉の励起→噴出する〈街頭〉を遠く生き／行きぬけようとする欲求……と連鎖するその欲求に他ならない。

私・たちは、「大行進」と「生の保障」研究団の営みを一対（いっつい）のものとして押し進めることを企図しているのだが、その一対のものとして進めるということの内実は、次のようなサイクルを形成することを意味する。「大行進」が「生の保障」の再＝定義の営みをまねきよせ、その「再定義」がこの「社会なき社会」において進行する「生の保障」の破壊――「社会的排除」の実態に対する「監視」団の営みをつきだし、その「監視」団の営みが個々の「生の保障」の請求者が「要求」者になりかわることを媒介する「生の保障」をめぐる「要求者組合」を生起させ、その「要求者組合」が「大行進」で自らを表現するというサイクル。このようなサイクルが回転することによって初めて、私・たちは、ひとつの〈生・労働・運動〉を生起させることになるのであり、それこそが、私・たちの「政治」ということになるだろう。

そして、それがある質量・強度を超えるとき、……と、私・たちは自らの〈夢〉を遠くまではせることもできるだろう。「夢見つつ深く植えよ」――この悪しき時代――ここでの文脈に即して最後にそれを言いかえれば、「生き抜くことがそのまま闘いであるような時代」（湯浅誠）――に、このように夢見ることは、私たちの

不幸なのか、それとも幸福なのだろうか。私・たちは、そのことに決着をつけるところにまで、よく歩きつくことができるだろうか？

〈註〉　この間、私・たちの周囲で浮上し、私・たちも「大行進」の最初の試みで掲げた「基本所得」構想は、まさに「生の保障」の再＝定義をうながすものであると、言って良い。「基本所得」構想のそのような問題喚起力については、雑誌「ＶＯＬ・０２」（０７．５以文社）の特集参照。

（「もうたくさんだ！」大行進／「生の保障」研究団　通信1　2007.6）

ⅱ．2007年～2008年
〈68年〉から40年／「米騒動」から90年

「米騒動」―民衆の「自主的米価設定」行動

今年は〈68年〉から40年目に当たるということで、〈68年〉ということをめぐって長い時間をかけて話してきましたが、この富山に即して言えば、今年は1918年の「米騒動」から90年目でもあるわけです。私はこの「米騒動から90年」ということを大きく考えていますが、「米騒動」について考える際には、富山での「米騒動」だけを見るのではなく、もっと全国的な視野が必要ですし、特に関西方面に広がった「米騒動」まで含めて考えなければならないと思っています。

この場の皆さんは、富山の「米騒動」についてはよくご存じかと思いますが、「シベリア出兵」を見越した投機などによって急激に米価が高騰する中で、富山湾沿いの水橋や滑川、魚津といった町々の「細民」の女房たちが、県外へ米が運び出されることを実力行動で阻止したり、米穀商店へ集団で押し掛けて米の廉売を要求したことから、「米騒動」が始まるわけです。その当時のとりわけ貧しい人々にとって、それこそ、米というものは人が生きることの保障を象徴するものだったと思います。「米騒動」は富山から始まって次第に西の方に広がっていきますが、広がれば広がるほど「米騒動」は勢いを増していきます。とりわけ大阪周辺では、「米騒動」は、一種の都市暴動であるかのような様相を呈して、地域によっては軍隊まで出動する

わけです。また、炭坑での労働争議と結びついた場合も、警察だけではなく、軍隊までも出動することがありました。

この日本社会では、「米騒動」に類似することは明治時代に入ってからも富山だけではなく全国各地で様々な形を取りながら継続してきたのですが、近代という時間の中で、名もない大衆が特定のリーダーや政治組織からの指導といったものなしに、まさに自分たちの生の保障の象徴である米をめぐって路上でそのような騒動を繰り広げたということは、現在でも大変大きな意味をもつ出来事であったと思います。

たまたま私がそんなことを考えていましたら、三里塚闘争の一つの行きつき方としてそこで「実験村」ということを掲げて、農をめぐる様々な取り組みを行っている人たちが企画している集会の案内が目に入ったのですが、その集会のタイトルが「まちの困民・村の困民」です。その中で、「村の困民」ということで話をする人は、私どもが懇意にしている、山形県の置賜盆地で百姓交流会という農民のグループで活動している人です。まさにこの「困民」という言葉が、この国で今の時代を言い表すような言葉になっているのではないかと思います。

今から90年前に、その当時の困民たちの「一斉蜂起」とでも言うか、米の搬入の実力阻止や米穀商店を集団で占拠して値上げ前の価格で米を売ることを要求するといった、まさに自分たちの生の保障の象徴である米をめぐる直接行動が各地で繰り広げられたのが、「米騒動」なのです。富山の「米騒動」の場合は裁判にかけられるところまでいった人はいなかったのですが、富山から西の方へ行くほど、騒動は過熱化したので、その中で逮捕されて裁判にかけられた人たちがたくさんいるわけです。「米騒動」で実刑判決を受けたのは、ほぼ全員がいわゆる被差別部落出身の人でした。全国水平社は「米騒動」から少したってから結成されるのですが、そのことにも象徴されるように、90年前の「米騒動」は、そのような運動を可能にした時代の始まりだったのではないかと思います。

「米騒動」―東アジア民衆闘争の一環として

もう少し言うと、「米騒動」というのは、1917年のロシア革命のいわば渦中に起こったとも言えるのではないかと思います。「米騒動」が起きたのは1918年ですから、1917年のロシア革命のすぐ後のことですし、それから、「米騒動」はまだ第1

次世界大戦の最中のことですから、それとの関連で、朝鮮では日本の植民地支配に抵抗する「三・一独立運動」がありますし、中国では、日本の帝国主義的な圧力に反対する「五・四運動」が展開されました。

このように、「米騒動」はロシア革命とのいわば世界的な同時性をもつ出来事ですし、東アジアでも、「三・一独立運動」や「五・四運動」といった一連の動きが起きているわけで、まさに「米騒動」もそのような東アジアでの民衆運動の大きなサークルの中にあると捉えてもいいと思います。つまり、民衆の時代が始まるのです。とりわけ日本は後発資本主義国家なのですが、第1次世界大戦の「火事場泥棒」的な経済成長の中で、日本の資本主義も独占資本主義の段階に突入していき、「米騒動」以後、日本での労働争議の件数はうなぎ登りに増加して、いろんな工場や職場に労働組合が結成されていきます。それに対抗して、国家の側でも、現在の社会保障・社会福祉にあたるような「社会政策」というものを、初めて真剣に考えなければならない段階に入ります。

ですから、日本史の研究者の間では、大正期を日本における「社会の発見」の時代だと見る人たちがかなりいます。明治という時代は、いわば、社会抜きの国家だけで「富国強兵」というスローガンを掲げて近代化路線を突き進むわけですが、大正期になると、社会という単位が国家という単位とは相対的に別なものとして存在するということが人々の意識に上り始めます。「社会的なものの成立」という言い方もされますが、国家の側が社会秩序の安定のために、「社会政策」を通じて社会保障政策を真剣に考えざるをえない時代に入ります。

このように、大正期になって社会という言葉が盛んに使われるようになりますが、それから昭和期に入ると、社会という言葉は押し並べて左翼的な匂いがするものとして、国家の取り締まり対象になるという時代がすぐにやって来ます。大正期といえば「大正デモクラシー」といわれるように様々な社会運動が活発に展開されていましたが、支配者側と民衆側との双方が、社会という言葉を積極的に使わざるを得なくなったのが大正という時代です。そのような時代の風潮の中で、選挙権を万人に与えよ！という運動の流れが大きな勢力となり、大正期の終わりには普通選挙が実施されることになるわけです。それと同時に、治安維持法も成立します。

「米騒動」―社会運動の開花を促したものとして

そのように、社会という人間の集合性が国家から区別され、ある広がりをもつものとして多くの人々に意識されるようになると共にいろんな社会運動が起こってきて、大正期には、いろんな思想にもとづいた労働運動が展開されます。その中でもとりわけ私が個人的に興味をもっているのは、いわゆる大正アナキズム系の労働運動です。アナルコサンジカリズムといった言い方もしますが、アナキストの大杉栄が生きていた時代では、それが一時期、日本の労働運動の主流を占めていたような時期もありました。しかし、大杉栄が虐殺されてからは、日本の労働運動からアナキストの影響は衰えていきます。もちろん、その他にも、「青鞜社」といった女性解放運動もあれば、「水平社」を中心にした被差別部落の解放運動もあるというように、大正期には、現在の日本社会に存在する様々な課題に関わる社会運動の大部分が登場しています。そういう時代の始まりが、「米騒動」ではなかったのかと思います。

それがそのすぐ後の昭和期に入るとどうなってしまったかは、皆さんもよく分かっていると思うのであえて言いませんが、大正期は、ほんの短い間に豊かな多様性をもつ様々な運動が花開く時代だったのです。今から思うと残念なことですが、ロシア革命が曲がりなりにも成功して共産主義政権が当時の世界で唯一ロシアで成立した後、周囲の国々がロシアを包囲して、革命を圧殺しようとすると同時に、それをロシアの外に波及させないための軍事的介入を行いました。そのような他の国々からの強圧的な包囲と軍事的介入によって、「一国社会主義」というかたちで、ソ連の中だけで革命を維持するしかなくなってしまいます。

そうした状況の中で、世界中のいろんな国々の社会主義や、共産主義革命を目指す運動が、ロシア革命を擁護することを自分たちの運動の主要な課題にせざるを得ないところにまで、追いつめられていきます。同時に、そうした世界中の革命運動や社会変革を目指す運動がコミンテルンという形でソ連共産党を頂点としてピラミッド状に編成されて、世界の国々のいろんな社会運動をモスクワの共産党本部が指導するという傾向がどんどん強くなっていきます。その余波が日本にもやって来ます。

大正期には有名な「アナボル論争」というのがありますが、アナキストたちとロシアのボルシェビズムを支持する人たちの間で、とりわけ労働運動をめぐって、激しい論争が大正期の終わり頃に繰り広げられます。残念ながら、アナボル論争は大

正アナキズムの中心的な人物であった大杉栄が憲兵隊に虐殺されてから次第に勢いがなくなり、日本の社会運動の中心はマルクス・レーニン主義の勢力になっていきます。そのような意味で、大正期というのは、前の私の話で使った言い方で言えば、共産党や全国規模の労働組合を頂点として諸社会運動がピラミッド状に組織化されるという、社会運動の「古典的範型」が形成され始める時代であり、同時に、大正期に豊かに花開き始めた運動がそこに収斂されてしまって、運動の多様性がボルシェビズムに切り詰められてしまった時代であったのです。

以前、渋谷さんに「アンラーニング」の学習会で話してもらった際に、「米騒動」について触れていたことの意味が今になって分かってきたように感じています。「アナボル論争」後、日本共産党の指導の下で日本の社会運動が「古典的範型」に切り詰められていく以前の、大正期の雑多でエネルギーにあふれた運動の可能性に注目したいというのが、渋谷さんの言いたいことだったと思います。そのような意味で、「米騒動」は時代を切り開くものであったと思いますし、それをいろんな意味でいじくり回してみたいんです。

ということで、社会運動の「古典的範型」の成立以前の大正期の運動が豊かに展開されることの出発点が富山にあったんだということを、「米騒動」の発祥の地であるこの富山の中で言っていきたいと思っています。

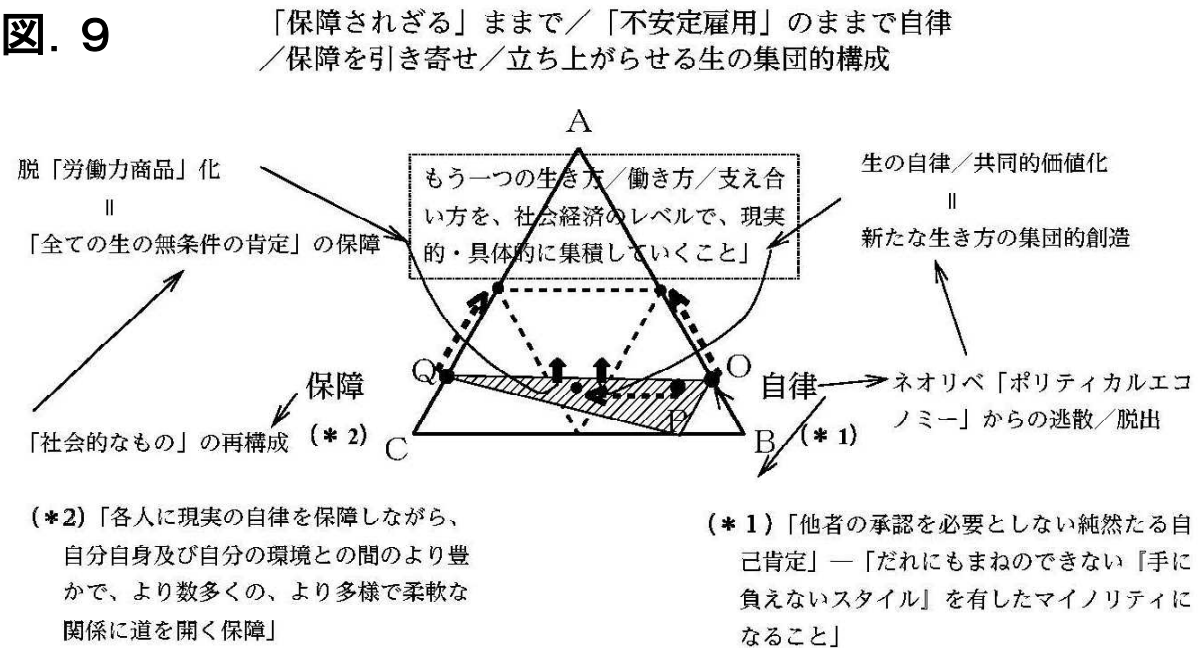
この08年という年に、90年前の「米騒動」について考えることの意味は、まさに「米騒動」から100年目を迎える今から10年後の2018年という時までに、私たちが新しい社会運動のあり方を創りだすための手がかりを探るということだと思います。言いかえれば、「米騒動」からは100年目に、〈68年〉からは50年目になる2018年までの今後10年の間に、この国での社会運動が、〈68年〉を一つの転機として解体されてきた社会運動の「古典的範型」に変わる、新しいモデルというものをどのようにつくりだすことができるかということが、私たちに問われているのではないかと思います。そのような意味で、「米騒動」から90年、〈68年〉から40年目に当たる今年08年は、自分たちにとって大きな意味を持つ年にしなければいけないと思っています。

（2007年12月、08年1月のニューズレターから採録したもの）

さらに、その〈先〉へ

それでは、私・たちは「『米騒動』からなにを受けとって、それでどうするか」ということについて、少しふれたいと思います。

図．9



それについては、[図・9]を見てください。線分$\overline{AO}$の「補註」としてそこに書いた「ネオリベ「ポリティカルエコノミー」への包摂」というのは何を表しているかと言えば、現在、「ネオリベ」の市場原理主義に人間を包摂していく力が作動しているということです。先ほど伝統的な民衆運動の中の「仁政－モラルエコノミー」（「徳義ある経世済民」）への要求ということを話しましたが、そのことを線分$\overline{BO}$の「補註」で「『客分』の現代的転成とは何か？」と書いたことに引きつけて言えば、それは、「ネオリベ」的な包摂に対抗しうるような「客分」というあり方の現代的な「転成」とは何か、という〈問い〉になるのではないかと思います。

先ほど「危険な階級」と労働者階級の連続性と言ったことを現在の状況に関連させて言えば、線分$\overline{BP}$＋線分$\overline{CP}$というのは、その「補註」にも書いたように、「『保

障されざる』」／『不安定雇用者』の連続性・連結性とは何か？」という〈問い〉になるでしょう。線分$\overline{AQ}$というのは、現段階における「社会的なもの」の構成のあり方を表しています。それは、この間よく言われる言葉で言えば、「ポスト福祉国家」における「社会保障」・「社会福祉」の縮減です。それに対して、線分$\overline{CQ}$というのは、支配の側によって構成されている「社会的なもの」を逆に民衆の側が構成しなおすということを表すものです。その「補註」に書いたように、私・たちが「「社会的なもの」の構成を構成しかえすとはどういうことか？」という〈問い〉が、そこにあります。

そのような一連の〈問い〉が、「『米騒動』から何を受け取るか」の〈先〉を考えようとするときに、浮かび上がってくる気がします。

次にいきます。**[図・9]**の周囲にいろいろと書いてあるのは、私なりにそれをもう少し中身をもって言おうとして書いてみたものです。**[図・9]**では、線分$\overline{BO}$の横に「ネオリベ『ポリティカルエコノミー』からの逃散／脱出」と書きましたが、それは「ネオリベ資本主義」と言ってもいいのですが、線分$\overline{BO}$と線分$\overline{AO}$の「せめぎ合い」というのは、ネオリベ的『ポリティカルエコノミー」によって人々を包摂しようとする力に対して、どのようにそこから逃げ出したり、はみ出したり、脱出を図ったりするか、ということになります。

それこそ、まさに私・たちが言う意味での「オートノミー（自律)」であり、イタリアの「アウトノミア運動」と言うときの「アウトノミア」ということではないかと思います。「資本主義の中で資本主義から逃れた複数の外部を創案する」、「資本主義のいたるところに穴を開けて生きていく方法を探し出すこと」。これは、韓国の研究集団の「スユ＋ノモ」のメンバーの李珍景（イ・ジンギョン）という人が書いた文章の中の言葉ですが。彼らが営んでいる「スユ＋ノモ」という研究空間がどのようなものか、という文章の中で、そのように言っています。

それをもう少し違った言い方でどのように言うかということで、点Oの横の「自律」と書いてある部分に(＊1)として「註」をつけたのですが、その下の部分に「だれにもまねのできない『手に負えないスタイル』を有したマイノリティになること」と書きました。これは、渋谷望さんの「魂の労働」という本の最終章の、「生が労働になるとき」にある言葉です。つまり、人間が自分の「労働力」を売ってそれが「賃金」となって返ってくることで生きるというのではない、資本主義的なあり方

からはずれたところに自分の「価値」を創るというか、イタリアの「アウトノミア運動」でよく言われた言い方をすれば、「自己価値創造（self-valorisation）」ということです。それは、つまり、「資本の承認を必要としない純然たる自己肯定」ということではないかと思いますし、さらに言えば、資本の外に出るための「尺度」を創る、ということだと思うのです。今でも、「客分」という在り方があるとすれば、「自律」を求めるということの中に、そういったことがあるはずです。それは、ネオリベ・グローバル資本主義からいかに脱出・逃亡するか、ということでもあるでしょう。現在の高円寺界隈の「素人の乱」なども、かなりそういったことに近いものではないか、と思います。

[図・9]で「ネオリベ『ポリティカルエコノミー』からの逃散／脱出」という言葉の先に、「生の自律／共同的価値化＝新たな生き方の集団的創造」と書きましたが、それが先ほど言った「自己価値創造」ということです。つまり、個々の人がどう生きるかというのではなく、集団的に資本主義にからめ取られない生き方をいかに創造するか。そのことを空間的に表現するあり方を、「素人の乱」の人たちは示しているように思います。それを一言で言えば、先ほどから言っているような意味での「自律」ということになるのではないか、と思います。

そういう「客分」というものの現在的な在り方がもしあるとすれば、そういうことの中に現れてくるものだと言えるでしょう。それは、自分たちなりの「モラルエコノミー」を現代的に編み直していく、組み直していくというか、そういうことだろうと思います。

それが片方のことだとすると、もう片方のQの方です。これは「自律」に対して言えば「保障」ということになります。これは、さっき言ったように線分$\overline{AQ}$が現在の「ポスト福祉国家」における「社会保障」・「社会福祉」の削減です。その力に対して線分$\overline{CQ}$がそれに対抗する力です。「社会的なもの」の構成を民衆の側が構成し直すというあり方のことです。それは、前から少しずつ言おうとしてきた言葉で言えば、「すべての生の無条件の肯定の保障」です。そして、その「社会的なもの」の再構成の核心にあるべきなのは、「すべての生の無条件の肯定を保障すること」です。いわゆる「労働力商品」であることから脱することのあり方――「労働力」が「商品」として売買されることを前提にした社会保障・福祉の中での一時的な「労働力脱商品化」のことでなく、「社会保障」という、高齢者に対する「保障」は、「労

働力」を散々売ってきて、年をとったからもう売らなくてもいい、生きていてもいいと認めてもらえるようなことではなく、――「労働力商品」として人が存在するあり方自体を否定する、それから逃れる、そういうことにあたることを軸にして「社会的なもの」を構成し直す、それが「保障」ということの意味です。そのことを考えるときに、例の「ベーシックインカム」＝「基本所得」が誘発的な「概念」として使われています。「保障」というのは、「基本所得」とはなにか、というふうに立ててもいいようなことだと思います。

そんなふうな「自律と保障の同時獲得」をめざしていくということが、「米騒動」から受け取ってそこから「現代の米騒動」を考えていくときのポイントだと思います。三角形ABCの各辺の中点を点線で結んだ逆三角形のところは、古くさい言葉で言うと、「二重権力状況」を表しています。ようするに、「米騒動」にあたるところが一番大きな面積をとるときが、これになります。向こう側にあるのが今日の支配の秩序だとすれば、それに対して逆三角形のところが「二重権力状況」みたいなものとして存在していることを表しているつもりです。

「もう一つの生き方／働き方／支え合い方を社会経済のレベルで現実的・具体的に集積していくこと」。もう少し現在風に言い換えて、「『保障されざる』ままで『不安定雇用』のままで自律／保障を引き寄せ、立ち上がらせる生の集団的構成」というように言いたい。資本主義というメカニズムで動いている社会に、そういうものがボコボコできる。そういうものがボコボコできて、上の三角形と対峙しているのが「二重権力状況」と言えます。このような言葉は死語に過ぎず、誰も使っていませんが。

90年前の「米騒動」から何を受け取って、何を持って「現代の米騒動」にもう一度戻っていくのか――というときに、受け取って、持っていけるものは、いま言ったことになるのではないかと思います。これが結論です。これらの言葉は上手く言い表せていません。そういうふうに言うことが普遍的に成り立つかは、よくわからないままで言っています。生煮えの言葉です。上手く使えていない言葉ばかりです。要するに、ネオリベ「ポリティカルエコノミー」、あるいは資本主義からいかに逃亡するか／いかに脱出するか。資本主義の中心部で、資本主義から逃れた「外部」をどしどしつくること。一方で、そういう生き方を一種の「保障」として認めさせることです。

いま、いわゆる「保障されざる者たち」、「不安定雇用労働者」などといわれている人たちが、自分たちの生存をめぐって、「生存組合」として自分たちを立てていますが、その時彼らが考えていることは「福祉国家」を再現したいことではなく、「福祉国家よ、もう一度」ということでないと思います。簡単に言えば、「不安定雇用」に対して言えば、「安定雇用」、「終身安定雇用」、「完全雇用」をめざしているのではないと思います。そういう点からフリーター労組、インディーズユニオン、小さなユニオンなどがめざしているもの、もとめているものを今後点検してみたいと思います。

（「『米騒動』から90年―私・たちは『米騒動』から何を受けとるか？」）

（2008年11～12月に行われた同題名の提起を採録したもの）

iii. 2008年:「困民丸」の船出

報告:

1.〈宿題〉

07年春、私たちはさまざまな意味において「生の保障」がないがしろにされている状況に対して、「もうたくさんだ！」という思いを街頭に出て表現しようと『もうたくさんだ！大行進』と名付けたデモ行進を行った。20数名が横断幕や桃太郎旗にそれぞれの「もうたくさんだ！」と思うことの訴えを書いたものを持ちより、富山駅のCiCビル前から出発した。

そして、その集合場所であるCiC前へと富山駅地下道を歩いている時、私たちは地下道で寝起きする人を見かけたのだった。

デモ行進の趣旨からすれば、彼等がその行進に加わっていることこそごく自然なことなのに、私たちの誰も、彼等をデモ行進に誘うことさえできなかったのだ。

その日のデモ行進は雷雨にたたられさんざんなものとなったが、それ以上に私たちは、地下道であった人たちのことが、重い宿題のように、ぬれた雨具のようにべったりと気持ちの中に張り付いたままになっていた。

2.〈行政〉

昨年9月、駅地下道で寝起きする人たちと通路の清掃を理由に退去を求める市道路維持課や清掃業者たちとの間でイタチごっこがくり返されていると報じた新聞記事が話題になった。

翌月、私たちはホームレスの人たちがおかれている現状を富山市が行政として、どのように把握しているかを調査することから始めることにした。関係する各課（道路維持課、公園緑地課、社会福祉課）に出向き、行政としての取り組みを尋ねた。予想通り、富山市当局は、厚労省からの指示にそった調査を年2回実施しているだけで、各課の間の連絡調整もほとんどなく、実質的なホームレス対策はもちろん、彼等一人ひとりがどのような状態におかれているかの実態把握さえなされていなかった。彼等の調査から分かるのは、調査時にホームレスと思われる人が駅の地下道や公園、橋の下などにそれぞれ何人いたのかということぐらいでしかなかった。

3.〈始動〉

富山市役所を何度か訪ね、市行政の対ホームレス調査の実態をまとめてから約2か月後、前記記事に関心を持ち、市内のホームレスの人たちに何らかの支援をと考えている者同士が、集まる機会を作ることができた。初めての顔合わせながら、集まった5人で、すぐに市の調査とは別に、まず自分たちなりのホームレスの人たちの実態調査、当事者からの聴き取りを始めることになった。

すでに1月半ば厳寒期を迎え、駅地下通路には、底冷えのする風が吹き抜けていた。北口側のからくり時計のある円形広場に集合した5人で、ホームレスの人たちから話を一人ひとり聞いてまわる。午後10時の時点ですでに5，6人の人が通路のあちこちで横になっていた。駅待合室など暖房のあるところで深夜近くまで過ごす人も多いらしい。それでも、この寒さの中で冬を越すことの厳しさだけは容易に想像ができた。

4.〈船出〉

その数日後、話を聞いてまわった中で、私たちに自分の身の上話をしてくれたホームレスのひとりが、救急車で入院したことが分かった。深夜には氷点下にまで気温が下がる吹きさらしの通路、その通路を市当局は明らかにホームレス追い出しとしか思えないように、早朝からの清掃作業を強行し、彼等の荷物を遠く離れた「保管」場所へと持ち去っていく。

急きょ、5人は集まった。ともかく市への抗議を行おう、支援活動を続けていく者として名

前を決めようと。こうして「ホームレス支援ネット・困民丸」の活動が実質的にスタートした。

1月31日、市に対してともかく、これまでの単なる実態調査から、実質をもったホームレス支援対策へと踏み出すよう強く要請し、3月議会後に私たちの側から提起する具体的支援策について、話し合うことを確認した。

2月3日、冷たい雨が時折ふりつける中、次々とホームレスの人たちが訪れ、30食分用意したカレーライスはどんどんなくなっていった。私たちはテントの設営、カレー作り、御飯炊き、机や椅子の用意と走り回り、何とか初めての炊き出し活動をやり終えた。

5.〈共鳴〉

この第1回目の炊き出しの様子が新聞・テレビで大きく報じられた。そのことがきっかけとなって、多くの人から、お米や現金、古着など多くの現物カンパが寄せられた。さらに、ホームレスの人たちがとりあえず路上から脱してあたたかい場所で過ごせるための一軒家を借りたり、食事の提供や仕事の斡旋もと、その構想をふくらませていった。それを知った人々から「引っ越しするので家具類、布団、家電品など必要なものを取りに来てほしい」との連絡があちこちから入り、富山市豊田高園町に確保した家に毎日のように荷物を運び入れる日が続いた。こうした慌ただしさの中、2回目の炊き出しを2月16日に終え、2月の下旬には、高園町に借りた一軒家＝困民丸ハウスでの共同生活がスタートした。

その間、支援に加わる人も徐々に増えていき、困民丸の今後の方向性をめぐる話し合いもようやく週に1度に定例化されてきた。さらに幅広く支援を要請し、それを受け入れるための「困民丸基金」の口座の準備も整った。

6.〈外海〉

最初の集まりをもってから2か月余り、ここまで「困民丸」は、一挙に出航の準備をし、いきおいこんで船出した。今は、波の穏やかな湾口を出て、いよいよ外海へと向かおうとしているところだと言える。

これからは、行政との長期にわたるホームレス支援対策をめぐる交渉もあり、さらには、困民丸ハウスに入居した人たちの今後の問題、入居していない人たちへの支援の問題等々、果てしなく続く波濤のように、さまざまな問題が遠く近く見えている。

3月16日は、3回目の炊き出し活動を行った。当日は、炊き出しを受けた人たちから、さまざまな声が上がった。行政に対して、そばを通行していく人々に対して、そして私たち「困民丸」に対して、それらの声にどう応えていくのか、あせらず、あせらずじっくりと取り組みを

続けたい。

今、この日本社会では人が生き生きと生きていくための「生の保障」を妨げるさまざまな困難が、ますますその厚みを増してきている。ホームレスと呼ばれる人々は、まさにその困難を何重にも引き受けざるを得ない位置に置かれてしまった人たちだ。

外海の波はますます荒い。困民丸がその波を乗り切りつつどこまで行けるのか。ほんのささやかな試みではあるけれど、「生の保障」を脅かされるすべての人々に通じる取り組みでありたいと願っている。

（「もうたくさんだ！」大行進／「生の保障」研究団　通信3　2008.3）

7.〈要望〉

１月末に、貴市が行っている駅地下道の「清掃」・「ホームレス調査」などについて、疑義を提起するために出かけてから、はや１か月余が過ぎました。

この間、私たちは、「ホームレス支援ネット・困民丸」を結成し、一方で「夜回り」を継続しながら、市内（駅地下道に限らず）在住のホームレスの人々との接触を進め、「炊き出し」などを行っています。他方で「困民丸ハウス」を立ち上げ、身体休養のうえ「就労」を希望するホームレス当事者・身体養生を必要とする当事者の入居を図りつつ、「生活支援」を行いながら、当事者の共同生活を進めています。

これらの営みを通じて、私たちは、充分とはいえないまでも、かなりの程度の広がりと深さにおいて、市内在住のホームレスの実態の把握を進め、当事者との意思疎通を行うことができており、貴市の把握を凌駕している、と確信しています。

幸いいろいろな方々から家具・衣類などの提供もあり、「困民丸ハウス」の居住環境も徐々に整いつつあり、また、多様な面から「支援」協力を申し出てくださる人々とのネットワークも広がりつつありますが、「支援」基盤を固め、「支援」の内実をさらに豊かなものにするには、「公的支援」が不可欠です。

つきましては、次の５点を貴市に要望しますので、貴市の「公的責任」として、「公的支援」に積極的に踏み出されるよう、要請します。

記

１．　ホームレス当事者が、気軽に相談しに出かけられるいわゆる「ワンストップサービス窓口」を駅周辺に設け、「支援ネット・困民丸」との協同の営みとして、運営すること

2．　ホームレス当事者で、「健康」を維持する上で肉体的にも精神的にも不安や不調を訴えている者に対して、「支援ネット・困民丸」との協議にもとづき、医療（ケアもふくむ）上の「手当」を講ずること

3．　ホームレス当事者で「就労」を希望する者・「生活支援」を必要とする者に対して、「支援ネット・困民丸」との協議に基づき、トータルかつ積極的な支援措置を講ずること

4．　ホームレス当事者の「生活保護」申請において、「困民丸ハウス」を「居住場所」として認めること

5．　現在「困民丸ハウス」として使用している住居を、市として「借り上げ」、その使用を「支援ネット・困民丸」に委ねること

6．　早急に市の「ホームレス支援計画」を策定し、「困民丸ハウス」など市民が運営する「通過施設」に対する助成などを可能にする手続を進めること、また、「支援計画」の策定にあたっては、「支援ネット・困民丸」の参加を認めること、及び、当事者の「要望」を聴取する機会を設けるなど、当事者の「声」を反映させる手立てを設けること

7．　市の「ホームレス支援計画」が実施されるまで、暫定的に、ホームレス当事者及び「支援ネット・困民丸」との間で、定期的に「協議」する場を設けること

なお、以上はあくまでホームレス「支援」者として緊急に必要だと考える措置に関わる「要望」であり、ホームレス当事者が貴市に対して直接「要望」を行う機会を持つことについて、当事者と検討していること、また、「支援ネット・困民丸」として、当事者の「要望」をふまえた「富山市ホームレス支援計画」構想について、いずれ貴市へ提起する予定であることを申し添えます。

（富山市長への要望書　2008.3）

「困民丸相談所」―― これまでと今後の課題

- 08年1月末、「ホームレス支援ネット･困民丸」として、スタート。当初は、主として、駅地下道に居住する「ホームレス」当事者を対象に炊き出し（駅北口　牛島公園）が中心だった。その後、市が「ホームレス」対策に積極的に取り組まないことが明らかになり、「ホームレス」当事者の「生活保護」申請にあたっての同行支援が中心になる。富山市福祉事務所が「住居」を決めていない者には、「生活保護」の申請を認めないという方針を撤回しないため、「住居」探し（同時に「連帯保証人」探し）に、苦労する。

  少しずつ市内の不動産会社との関係づくりが進み、道が開け始め、「生活保護」申請が大きく前進する。「生活保護」の受給が決まった者については、当初は、65歳前後の年配者が多かったが、いわゆる「累犯障害者」にあたる者や中年後期で何らかの「障害」をもつ者など少しずつ多様化が進んでいる。

  「生活保護」受給者で、「アパート」居住へ移行する者が少しずつ増加する一方で、数名の者が「困民丸ハウス」に入居し、共同生活を行いつつ、受注した軽作業にたずさわることも進んだ。しかし、どちらの場合にせよ、「路上からタタミへ」移行した者が、「ホームレス」歴が長ければ長いほど、その社会性を回復することは難しく、「アパート」居住者に対する「アフターフォロー」の支援に右往左往する一方で、「共同生活」の維持も大きな困難にぶつかる。

  「共同生活」の維持をめぐって、その延長上に「事業体」を考えたい者と「保護施設」のようなものは行政がやるべきものだと考える者とのあいだの亀裂が深まり、前者は、その形を続けたが、12月に「困民丸ハウス」は解散した。後者は、昨年6月から「困民丸相談所」を立ち上げ、その後、現在まで継続している。

- 上の両者の手で「生活保護」受給が可能になった者は、30名に近い。昨年の夏前からは、「ホームレス」当事者で受給が決まった者が、「ホームレス」間の「情報ネットワーク」を活用して、「困民丸相談所」につなぐというやり方も進む。また、昨年の秋頃からは、他の機関（「富山市民病院」・「富山社会福祉協議会」・「富山中央警察署」・「ハローワーク富山」など）から「困民丸相談所」への照会を通じて、接触が始まるというようなケースも増えつつある。

  この間――とりわけ昨秋からの「派遣切り」の大量化にともない、「ホームレス」のみならず「派遣切り」当事者との接触も少しずつ拡大している。

  昨年末、粘り強く交渉して、年末年始に「ハローワーク富山」の敷地内で炊き出しを行い、小さなものではあれ、折からの東京での「年越し派遣村」と軌を一にする企てを進めた。「派

遣切り」がすすむ中で、「自治労」の炊き出しも始まり、昨年から進められてきた富山福祉短大の学生による炊き出しも含め、月に3回の炊き出しが行われている。

スタートしてから１年たって、現在直面している大きな問題としては、何より、平日昼間（とりわけ「お役所仕事」との関係で、平日昼間にしかやれないことが多い）に支援活動を行う者の決定的不足がある。支援活動上の問題としては、第１に「生活保護」申請から受給までの約１ヶ月間の「生活資金」を用立てることの困難、第２に、「生活保護」申請が不可能な者の「住居」及び「生活資金」の確保の困難（様々な「生活資金貸付」制度は、基本的には「ホームレス」には利用不可能である）、第３に、「路上からタタミへ」移行した者が、自らの社会性のありようについての認識を深め、それを変えることに自覚的に取り組むことを支援することの困難である。

「困民丸相談所」としては、「生活資金」の問題については、今回の悪評高い「定額給付金」の支給の始まりを一つの契機として「生活困窮者生活支援基金」への協力の呼びかけを行うこと及び「困民丸一時宿泊所」を立ち上げることを、今年のプロジェクトとして進める予定である。

- 「ホームレス」状況に滞留する者が増加し、「ホームレス」状態にいたるスピードが加速化し、労働する者が多かれ少なかれ「不安定」化される社会のありようを、私たちはいつまで許すのか？――「ホームレス」支援は、私たちが、この〈問い〉を自らの〈問い〉として立ち上がらせることに接近する一つの回路だと、「困民丸相談所」は考える。

私・たちと共にこの〈問い〉を共有してくださる人々に、「困民丸相談所」への協力支援を、お願いする。

（困民丸相談所　「これまでと今後の課題」　2009.3）

Ⅳ．2008年：「生・労働・運動」の現状と課題

「アンラーニングプロジェクト08
資本主義を見限る―生・労働・運動の現在と課題」の
「オープニング」から

社会保障・福祉の容赦のない削減や、労働者保護の解体といった、今、私・たちが直面する「生の保障の破壊」を個人的な不幸や「自己責任」とする発想から決別して、その根底にあるネオリベラリズム／グローバリズムに対する反撃へと転換したい――そのためにも、私・たちの生がどのように抑圧・収奪されているかを見抜くための「遠近法」の獲得が切実に求められているはずです。このような思いから、私・たちは昨年の春、「アンラーニングプロジェクト07」をスタートさせました。とりわけ、その後半の「第Ⅱ期」の学習会では、世界各地で活発に展開されている反ネオリベ・オルタグローバリズム運動の動向や、この国でのフリーターや不安定雇用労働者といった「保障されざる者」たちの運動から、ネオリベラリズム／グローバリズムに対抗するための手がかりをつかむことを試みてきました。そこでの論議を踏まえて、私・たちは昨年度に引き続き、「アンラーニングプロジェクト08」を企画し、5月11日（日)、「オープニング」を行いました。以下は、その「オープニング」での論議のアウトラインです。

「アンラーニング08」の「オープニング」では、まず最初に、今年度をどのように進めていくかを参加者同士で考えあうための一つの素材として、当日の進行役から、昨年度の「アンラーニング」での論議を、特に「第Ⅱ期」の学習会での話を中心として整理して捉えなおすことが行われました。

この数年、東京や大阪、福岡といった大都市では、「フリーターメーデー」や「持たざる者たちの国際連帯行動」など、いわゆる「プレカリアート」、すなわちフリーターや不安定雇用労働者が「生の無条件の肯定」を掲げて、街頭で声を上げると

いうことが行われるようになっています。昨年度の「第Ⅱ期」の学習会でも、東京での「家賃タダにしろ！一揆」の映像が紹介されたりしていましたが、昨年度の「アンラーニング」での論議を通じて、そのような「保障されざる者」たちのまだ名前のない運動が、現在、この国の中からそれなりの厚みと広がりをもって生み出されつつあることを、実感することができました。

人間が資本にとって交換に値するだけの有用なものを提供できる限りで生存をかろうじて許容され、さもなければ容赦なく「廃棄」されるという、まさに「社会」なき社会の出現――このような現状に対抗して、この国の「保障されざる者」たちの運動では、賃労働か、さもなくば社会保障・福祉による公的支援によって生きるかという二分法それ自体を問いなおす、無条件の「生の保障」要求が行われると共に、人々が生を受け、次世代を育て、病み、老いを迎えることを共同で支える場としての「社会」を、私たちがもう一度どのようにつくりなおすのかという根本的な問題提起が、そこでなされているように思えます。そこに存在するトータルな運動のあり方や運動間の横断性――例えば、「生の保障の破壊」への反撃を、反戦運動や、未払い賃金の支給を要求する労働運動、更には、自分たちを低賃金・無保障の労働力として利用していながら、「無能者」・「寄生者」として差別視するメインストリームの社会の体質を批判する「文化」・社会運動として展開するような――の中に、私・たちがつくりだしたい新しい運動スタイルの萌芽が存在しているように感じています。

99年、アメリカ・シアトル市でのＷＴＯ閣僚会議を数万人規模の抗議行動で包囲・流会させた「シアトルの乱」に象徴されるような、ネオリベ／グローバリゼーションに対抗しようとする世界各地での反グローバリズム運動については、昨年度の「アンラーニング」の学習会でも何度も触れられていました。規模としてはまだまだ小さなものではあれ、そのような世界規模での反グローバリズム運動に連動・呼応するような、「保障されざる者たち」の反乱・抵抗の兆しとでも呼ぶべきものが、ようやくこの国でも登場しようとしているのではないでしょうか。

今年08年は、世界中でベトナム反戦運動を中心に若者たちの異議申し立てが激しく展開された〈68年〉から、40年目に当たります。この国での〈68年〉の運動については、一方では、かって権力と華々しく闘ったことが「武勇伝」や「オヤジの

昔語り」として語られるか、また逆に、「連合赤軍事件」に象徴されるように、後の世代が社会的な運動に関わること自体をためらわせるような日本の左翼運動の持つマイナス面のみが強調されてきたように思います。しかし、それはまちがいなく、70年代以後の障害者運動や女性解放運動などの反差別運動や、反公害運動といった地域闘争を生み出していきました。何よりも、〈68年〉の運動が、共産党を頂点にして大労組に組織化された労働者階級を「本隊」として様々な運動がピラミッド状に構成されるという、それまで長らく続いてきた社会運動の「古典的範型」を決定的に時代遅れのものにしたという意味で、この国での社会運動に大きな「分水嶺」を画したことは、決して忘れてはならないでしょう。

〈68年〉の運動のそれまでにはない特色として、社会的な不正義や抑圧への憤りということに止まらないような楽しさ・「快楽」の要素と、社会変革を指向することとの結合ということがあったように思います。それは、いわば、そのままでは窒息してしまうような閉塞感を集団で体を動かして突破することによる、「行動的快楽主義」とでも呼ぶようなものではなかったのではないでしょうか。現在、この国での「プレカリアート」たちのサウンドデモ等による「ストリート解放運動」については、マスコミでも少しずつ注目されるようになってきていますが、それは一面では、単に、今の若者たちがお金がなくてもそれなりに楽しくやっているという「若者風俗」や、ある種の「ライフスタイル」として回収されてしまうようなところが全くないわけではありません。しかし、そのような「プレカリアート」たちの「ストリート解放運動」が、〈68年〉の運動の中の「行動的快楽主義」と重ね合わされることで、その社会変革的なポテンシャリティーは、より明らかに見えてくるように思います。逆に、現在の「プレカリアート」たちの運動に照らし合わせて捉えることが、〈68年〉の運動のもつ可能性を私たちがもう一度どのように「活用」するのかを考えるための、一つの手がかりになるように思います。

また今年は、〈68年〉から40年目であると同時に、「米騒動」から90年目でもあります。当時の民衆にとって「米」というものがまさに生きる上で不可欠な「生の保障」を象徴するものだったはずですが、ネオリベ／グローバリゼーションがもたらす「生の保障の破壊」を否応なく強いられる現在の私・たちにとって、90年前の「米騒動」が新たな意味やリアリティーを持って迫ってくるようになってきている

ように思います。富山を発祥の地とする「米騒動」は、炭坑での大規模なストライキとも連動しながら、全国各地で約100万人もの民衆が加わる大規模な社会闘争として展開されましたが、それはその前年のロシアでの「12月革命」や、その翌年の日本統治下での朝鮮での「三・一独立運動」、中国での「五・四運動」といった世界規模での民衆闘争とも重ね合わせて捉えることができるでしょう。

また、当時は、工場労働者を中心とする「プロレタリアート」が日本の中でしだいに一つの社会的な勢力として登場するようになってきた時期でしたが、それから90年後の今日、「プロレタリアート」ならぬ「プレカリアート」が労働者のある種の典型的なあり方になろうとしているという意味で、「プロレタリアート」と共に成立したこの国での資本主義が一つの大きな転換を迎えようとしていると言えるでしょう。「大正アナキズム」とも称されるように、当時は、運動的にはアナーキスト的な傾向が優勢でしたが、そのような社会運動の「古典的範型」の成立以前の運動が体現していた雑多なあり方に注目することが、社会運動の「古典的範型」の解体後を生きる私たちにとっての一つの大きな「糧」となるのではないでしょうか。そのような意味でも、あえて自分たちの「遠近法」をかく乱させて、この国での資本主義の成立から現在へという大きな歴史的なサイクルという視点から、現在の状況を当時の運動状況や世界状況を重ね合わせて見ることが求められているように思います。

以上のように、この国で新たに生まれつつある、「保障されざる者」たちの反乱・抵抗の兆しが、全世界的な反グローバリズム運動や、〈68年〉の運動、「米騒動」と相互に照らし合わされることで、それぞれの運動のポテンシャリティーや可能性がさらに明確に浮かび上がってくるのではないかということが、昨年度の「アンラーニング」での論議を振り返りながら、何度も強調されました。公共サービスの「民営化」や、強引な炭坑つぶしといった「ネオリベ改革」を強行したイギリスのサッチャーが言ったとされる、"There Is No Alternative."「（ネオリベ以外に）他の選択肢はない」という、反ネオリベ運動の中で有名な言葉があって、その頭文字を取って、TINAと呼ばれているそうです。まさにそのような、「ネオリベ以外に選択肢はない」 という現在、この国を覆い尽くしている諦念やシニシズムを打破するような動きが、「社会」なき社会というべき現状の中で「無条件の生の肯定」を

求めて声を上げ始めた「保障されざる者」たちの運動として、ようやくこの国の中から生まれてきているのではないかということが、昨年度の「アンラーニング」を振り返ることの締めくくりとして語られました。

（アンラーニングプロジェクト「ニューズレター」2008年7月）

Ｖ．2009年:「社会運動の現在的課題
――今のようではない生の集団的創造へ」

「アンラーニングプロジェクト０９」では、「グローバル経済の破綻は私たちの失敗ではない――『今のようではない生』の創造への〈鍵〉をさぐる」をテーマとして、５月１０日（日）の「オープニング」を皮切りに、そうした課題を解くことに向けて、私・たちが手にしている／手にすることができる〈鍵〉をさぐりあうことを試みています。以下、「アンラーニング０９」の「オープニング」での論議のアウトラインを紹介します。

「アンラーニング09」では何を目指すのか

５月１０日（日）の「オープニング」では、最初に、「グローバル経済の破綻は私たちの失敗ではない――『今のようではない生』の創造への〈鍵〉をさぐる」という今年度の「アンラーニング」のテーマの設定のねらいや、今年度の進め方についての提案・説明が行われました。

昨年度の「アンラーニング」では、「資本主義を見限る」をテーマとして、「マンガ　反資本主義入門」を素材に、現在のネオリベ・グローバル経済に対する世界規模での抵抗・反撃がどのように現れているかを探りました。また、昨年０８年は、富山を発祥の地とする「米騒動」からちょうど９０年目でしたが、その「米騒動」の運動史的な意義を考え合いたいという思いから、

「アンラーニング」の特別企画として、「ラウンドテーブル：『米騒動』から90年―私・たちは『米騒動』から何を受けとるか？」を行いました。そこでの論議を受けて、昨年度の「アンラーニング」のプログラムの後半では、「『現代の米騒動』をさぐる」というテーマで、「現代の米騒動」と自称／他称されている、「フリーター」の労働組合や反貧困の運動といった現在の「保障されざる者」たちの動きから、90年前の「米騒動」のように「生」の保障要求を集団的に行う、いわば、「騒動による団体交渉」の現在的な再生の可能性を探りました。

昨年度の「アンラーニング」では、併せて、昨年の洞爺湖Ｇ８サミットに対する対抗アクションを通じて、今までにない運動間の横断的な結合や新しい運動のスタイルが、この国でどのように生み出されようとしているかにも注目しました。洞爺湖サミットへの対抗アクションの中では、それまでのサミットの30数年の「歩み」自体が問い直されていました。75年のフランス・ランブイユでの最初のサミットの開催は、70年代初頭のドルショック・オイルショック等による「先進国」の世界支配の揺らぎに対抗して、ＩＭＦや世界銀行といった国際金融機関の創設を軸に「先進国」優位の世界秩序を再確立しようとする動きと軌を一にするものでした。それによって、債務不履行状態に陥ったアフリカ・ラテンアメリカ諸国に強制された「構造調整」政策を、後に「先進国」内部にまで「応用」したのが現在のネオリベ「改革」だということが、この国での洞爺湖サミット対抗アクションの中で改めて思い起こされていました。

そのように、第三世界での「構造調整」政策まで含めれば、30数年の長きに渡り、世界の政治・経済の支配的なパラダイムとして、全世界的に人間の「生の保障」を破壊し続けてきたネオリベ・グローバル経済路線が、今、「暴走」のあげくの自業自得として「自壊」しつつあります。しかし、昨年末からの金融危機を口実とする「派遣切り」・大量解雇の横行に表れているように、ネオリベ・グローバル資本主義はその延命のために、自らの破綻の「つけ」を私・たちの「生」の保障の更なる破壊として私・たちに押しつけよう

としてきています。そのような意味でも、現在、私・たちに否応なく強いられる「生」の困難を、人間の「生」を保障しない資本主義を「具体的に見限る」ことへ転化させ、市場経済の外での「生」の創造のための仕組みを、新たな「コモン」として、私・たちがどのように自らの手で生み出しうるのかを、考え合うことが切実に求められているはずです。

「アンラーニング」の中でも何度も触れられてきた〈６８年〉の運動や、現在の「保障されざる者」たちのアクションや相互扶助の実践、また、集団で米屋の店頭を占拠して高騰前の値段での米の廉売を要求するという「騒動による団体交渉」を通じた「米価の自主決定」を行った90年前の「米騒動」――それらを重ね合わせた連続線上に、そのための手がかりをかいま見ることができるように感じています。

そこに示唆されているような、市場経済の外での「生」の創造のための仕組みを私・たちがどのように生み出しうるのかという課題に向けて、今、私・たちが手にしている／手にすることができる〈鍵〉をさぐることが、今年度の「アンラーニング」の大きな課題です。それに向けて、利潤追求ではなく、人間のベーシック・ニーズを充たすためのものとしての経済システムの転換や、南米を中心として近年活発に展開されている自律的な「生存空間」の構築の実践、また、全ての者に無条件で生存を保障するための「基本所得」などを具体的な論議の題材として、資本主義を「具体的に見限る」ための手がかりをさぐりあうことを試みていきたいと考えています。

今のようではない「生」の集団的創造へ

以上のような今年度の「アンラーニング」のテーマや進め方をめぐる提案・説明を更に補うものとして、今回の「オープニング」では、併せて、「社会運動の現在的な課題――『今のようではない生』の創造への〈鍵〉をさぐる」と題する「提起」が、約１時間余りにわたって行われました。以下は、その「提起」の概要です。

今、人々を追い詰めてきたネオリベ・グローバル資本主義自体が大きなつまずきの中にあるということを、人々の側からこの非人間的な資本主義を否定し返すチャンスにしようという気運が生まれつつあります。資本主義を「具体的に見限る」という今年度の「アンラーニング」のテーマは、一見大げさで抽象的なもののようで、実はこの日本列島で生きている限りにおいて、多くの人々の実感においても「リアル」になりつつあるのではないでしょうか。そのテーマを更に補足・説明するために、昨年度の「『米騒動』から９０年」の前後に考えていたことから少しお話ししたいと思います。かっての幕藩体制期などでは、支配層が「主」としてあることに対して、民衆の側は「客分」として存在していて、普段は政治を為政者にまかせて政治的なことには無関心に生活するというのが通常でした。しかし、飢饉や悪政などで生活が脅かされるような時には、民衆の側は一揆や打ち壊しといった反乱・抵抗を通じて為政者に「仁政」を求めるというのが、「客分」としての伝統的な民衆のあり方でした。そのような意味で、近代に入ってからの「客分」としての民衆による最後の騒動が、９０年前の「米騒動」だったと言ってもいいでしょう。

そのように、権力奪取や、既成の権力構造への参加を目指すのではなく、集団的な直接行動を通じて「生の保障」を要求する存在としての「客分」の現在的な「転生」の可能性を、この国での「保障されざる者」たちの運動の中に見ることができるのではないでしょうか。この間のネオリベ「改革」の中では、「お前の『生き難さ』は、自立できていないお前の『自己責任』だ」ということを、ずっと言われ続けてきました。それに対しては、きっぱりと「私たちの貧困は私たちの『自己責任』ではない」と言わなければならないし、「米騒動」のことを考えようとした際に自分たちが手にした考え方で言えば、ネオリベ「市場原理主義」からいかに「逃散」するかということが、私・たちにとっての「自律（オートノミー)」であるはずです。

それは更に言えば、自分の生き方を計る尺度を近代社会や、ネオリベの価値観にゆだねないということでしょう。また、「客分」の現在的な「転生」

ということを別の角度から捉え直すならば、それは、ネオリベによる「社会的なもの」の縮減に対して、「生の無条件の肯定」という理念から、「社会的なもの」のすえ直しを求めるということでもあるでしょう。そのように、「市場原理主義」からいかに「逃散」して、自律的な価値観で自分の生き方を組み立てていくことを、「全ての生の無条件の肯定」のための仕組みをどのようにつくりだすかということで「裏打ち」していく、一言で言えば、「自律」と「保障」との結合ということが、私・たちが資本主義を「具体的に見限る」ということの内実になるでしょう。

今回の「提起」のレジュメの中でも書きましたが、「『今のようではない生』の創造＝もう一つの生き方／働き方／支え合い方を、社会／経済のレベルで、現実的に・具体的に、集団として蓄積していく」という問題意識が、ようやくある段階にまで到達してきているように思います。昨年度の後半の「アンラーニング」では、「フリーター」の労働組合といった、現在のこの国の「保障されざる者」たちの運動を、現代の「米騒動」として捉え直すことを試みましたが、そこで取り上げたフリーター労組の人たちの書いた文章を、今日のレジュメにもいくつか載せました。「生の新たな様式を発明しようではないか。資本主義＝市場的交換とは別の友愛に満ちた相互的扶助的交換を発明しようではないか」、「むしろ、惰民として、単なるプアとして生き延びる技と知恵こそが重要なのだ」といった言葉をそこに引用しましたが、自分たちが言いたいのもそのようなことなのです。フリーター全般労組というところは、既成労組とは全然違うセンスで労働運動を行っているのですが、そこで言われている言葉を使えば、私・たちが目指そうとしているのは、「賃労働ではなく、自由と生存を擁護し、新たな生のかたちを生み出していく運動... つまり単なる労働運動ではなく、生存運動」ということになるでしょう。

この国よりもはるか以前からネオリベ「改革」に攻撃されてきた地域が中南米ですが、それを逆転させていこうという動きが、90年代から登場してきています。今日の資料の中に、広瀬純とアルゼンチンの運動集団との対話から生まれた、「闘争のアサンブレア」という本の中からの引用を載せました。その文章の中の「ピケテロ運動」というのは、この国の「派遣切り」当事者に近いような失業者たちが、工場で闘うのではなく、首都のブエノスアイレスと地方を結ぶ幹線道路を封鎖して物流を阻止するという運動です。それと同時進行で、ブエノスアイレスの郊外の放棄された農地の「自主耕作」や、倒産した工場での「自主管理」による生産活動も行

われています。そこに現れているように、生きていく上で自分の労働力を企業に買ってもらうことを必ずしも前提にするのではなく、自らの生産的活力というものを自分たちの生きることのために使うものへと「逆転」させているのです。

01年から03年ぐらいまでが「ピケテロ運動」の最盛期で、現在は運動と現政権との関係は微妙なものらしいのです。しかし、そうではあれ、ここに引用した言葉で言えば、そうした「『完全雇用』の地平にはもはや立っていない」失業者たちの運動は、「『失業』それ自体から、ポジティブな意味を引き出そうとする試み」であり、「資本制システムに回収されないような自律的な経済空間あるいは生産空間をそれぞれのバリオにおいて構築するという、驚くべきプロジェクト」なのです。――このところ、改めて着目されている谷川雁と「大正行動隊」、その後の「退職者同盟」が、今日の私・たちに指し示しているものも、まさにそのことに関わっているのではないかと思います。

以上、いくつかの引用を経由して、自分のイメージをふくらますようなことをしてきましたが、そのように、全世界的な運動の課題として、資本主義システムや市場経済に依存しない「新しい生」のあり方をどのように人々の集団的な営みとしてつくりだすかが問われるところまで、現在、ようやくたどりついたということではないかと思います。そのような動きはこの国ではまだまだ弱いのですが、私・たちの課題としては、そのような全世界的なレベルと同じところまでどのように肩を並べるのかが問われているように思います。そのような意味でも、私・たちはどのように反資本主義的・市場主義的な「生」の形を生み出していくのかをめぐって、この一年で、論議を積み上げていかなければならないと感じています。

更に言えば、現在、人々を追い込むことの速度が上がってきているわけですが、派遣労働者や、ホームレスの人たちがすぐ隣り合わせの場所で、同じように「生」の困難に直面しながら、互いに語り合うことができないという現状があります。それに対して、この国で「生」の困難に直面する者同士が、同じ言葉や理念を語り合うところにまで、どのようにたどり着くかということが、今年度の「アンラーニング」の大きなテーマです。

（アンラーニングプロジェクト「ニューズレター」2009年8月）

Ⅵ．2009年：「アブレ者」の路上会合

報告：09・5／23「『アブレ者』の路上会合」

―「今のようではない生」の創造へ向かうことの始まりへ

５月23日(日)、私・たち「生・労働・運動ネット」は、30人余りの参加者と共に、富山市の中心部の街頭で「『アブレ者』の路上会合」を行った。その「路上会合」の準備の過程や当日の動き、また、今回、「路上会合」を行ったことを一つの契機として、私・たちがどのような方向へと歩を進めようと考えているかについて、以下、報告したい。

１．「路上会合」に向けて準備スタート

街頭アクションのコンセプトと名称を決定する

富山の私・たちが、反原発といった特定の社会問題ではなく、人間の「生」を保障しないこの社会のあり方それ自体に対して異議申し立ての「声」を上げる街頭行動を初めて行ったのが、０７年４月末の「『もうたくさんだ！』大行進」であった。「『もうたくさんだ！』大行進」では、「福祉の切り捨て」等、「こんなことはたくさんだ」、「もういいかげんにしろ」と思うことをそれぞれが持ちよって、富山市中心部の街頭で、デモ行進・街頭アピールを行った。

昨年末から、アメリカ発の金融不安を口実とした「派遣切り」・大量解雇の横行によって、雇用を失うことがそのまま、寒空の下で住居を失うことに直結するという危機に多くの人たちが直面しているということが、マスコミで盛んに報道されていた。そのように、大企業が不安定雇用労働者を酷使して荒稼ぎを続けてきたあげくに、いったん経済が停滞すれば、何のためらいもなく、基本的な生存すらも保障されないような状態に彼ら・彼女らを突き落としているという現状に対する憤りから、やはり自分として再び街頭で声を上げたいということが、「生・労働・運動ネット」のメンバーの間で話されるようになっていた。

私・たちは、０７年春から「自己責任論」の「学び捨て」（アンラーン）を図り、私・たちの「生」がどのように抑圧・収奪されているかを見抜くための反ネオリベ

的な「遠近法」の獲得を目指すための自由で活発な学習・討論の場として、「アンラーニングプロジェクト」をスタートさせ、現在に至っている。昨年度の「アンラーニング」のプログラムの後半では、「現代の米騒動」と自称／他称されている、「フリーター」の労働組合や反貧困の運動といった現在の「保障されざる者」たちの動きから、９０年前の「米騒動」のように「生」の保障要求を集団的に行う、いわば、「騒動による団体交渉」の現在的な再生の可能性を探った。その中で、この国の各地での「保障されざる者」たちの街頭でのアクションの記事や映像にふれたことも、自分たちがもう一度、「『もうたくさんだ！』大行進」のような街頭行動を行いたいと考える上での大きな刺激となった。また、その際には、街頭でのデモ・アピールだけではなく、もう少しイベント的・アクション的な要素を盛り込みたいという思いも自分たちの間でふくらんでいった。

４月初頭から、街頭でのアクションの企画を中心となって考えようと思う者が何人か集まり、街頭アクションの企画・準備のための話し合いを進めていった。その話し合いの中で、デモ・街頭アピールと併せて、屋外テントで食事を提供する「無料食堂」なども提案され、当初は「『もうたくさんだ！』大行進」の延長線上で、「もうたくさんだ！祭り」といった企画の名称を考えていた。――そのような企画をそのまま現実化することにならなかったのは、一方で、以下にふれるように企画のコンセプトをさらに前に進めるというポジティブなねらいに基づいてのことであった。他方で、それとはウラハラに、「路上会合」という押し出し方にも関わらず、なおそこに「路上」生活者（「ホームレス」）を招くまでには至っていないという、苦いネガティブな現状があったことを銘記しておかなければならない。

企画の名称と全体的なコンセプトについては、その後改めて、「生・労働・運動ネット」全体での論議の場で論議された。その際に、もはや、生きがたさの中から「もうたくさんだ！」という声をあげるという段階から、もう一歩〈先〉を進める時ではないかという意見が出された。それに付け加えて、全世界規模で生の保障を破壊しながら、暴走し続けてきたあげくに「自壊」しつつあるネオリベ・グローバル資本主義に対して、私・たちの側からはっきりと「退場宣言」をつきつけるということを、今回の企画のコンセプトにするべきだという発言もあった。それらの意見・発言を受けて、「全ての『アブレ者』諸君！ヤツラノ責任追及へ向けて二歩前進！！」というスローガンや、「『アブレ者』の路上会合」という名称を決定した。

いかに賑やかしく見せるかの工夫に力をいれる

その後、４月２９日の連合富山のメーデー会場でのビラまきや、公共施設での置きビラ、富山の各新聞社へのマスコミ回りなど、自分たちとしては最大限、「『アブレ者』の路上会合」の情宣に努めた。しかし、富山のような地方都市で、このような街頭アクションへの参加者があまり多くはないであろうということは、当然、今までの経験からも予想された。そこで今回の「路上会合」では、とにかく少ない人数でいかに賑やかしく見せるかの工夫に力をいれた。「全ての者に無条件で生活維持賃金――基本所得を！」というスローガンと「『アブレ者』の路上会合」の名称を書いた、広げると３・５メートルもの長さになる折りたたみ式の横断幕や、「『派遣切り』労働者の求職労働に生存賃金を！」といったスローガンを掲げた桃太郎旗を作成した他、背負うと３メートル以上の高さになる、麻生総理、石井富山県知事、森富山市長の３人の顔をつけたパペットを制作した。

また、今回、「路上会合」のスローガンの一つである「喰ワセロ／住マワセロ／生キサセロ」を歌詞に織り込んで、生きることの保障を上の３人に要求する、オリジナルのプロテストソング（「アブレ者のマーチ」）もつくった。「路上会合」の当日の前段集会で、参加者の前でそれを実際に歌って披露する予定になっていたということもあり、「路上会合」の数日前、アベックが目につく夜の公園の一角にアンプとマイクを持ち込んで、デモのスローガンの声だしと併せて、何日か前に完成したばかりの「アブレ者のマーチ」の歌の練習を行うという一幕もあった。

（「生・労働・運動ネット　レポート」　2009.8）

2.「ヤツラの責任追及！」の声を街頭で響かせる
―「路上会合」の当日の動きから

「路上会合」いよいよ本番！――前段集会・街頭アピール・「野外交流会」

いよいよ１２時半から、スピーカーをつけた街宣車の前に参加者が集まり、「路上会合」の前段集会がスタートした。最初、進行役を務める「生・労働・運動ネッ

ト」のメンバーが、「『生』の保障を破壊・剥奪されてこの社会から『あぶれる』ことを強いられている私・たちが、今日は「アブレ者」として富山の街中で共に元気に声をあげていきましょう」と、あいさつを行った。それに引き続き、「路上会合」の前段集会では、県外からの４人の参加者も含めて何人もの参加者がアピールを行った。とりわけ、多重債務者の当事者団体「富山あおぞらの会」のメンバーが、「こんな人間の生を保障しない国は、ぶっこわれてしまえばいいんだ！」と発言したことに対しては、会場の他の参加者から大きな共感と拍手が寄せられた。

それらのアピールに続いて、街頭でのデモ行進・アピールの際のスローガンや、「アブレ者のマーチ」の披露・声だしを行った。最後に、６０年代後半から７０年代前半のアメリカで戦闘的な黒人解放運動を展開したブラックパンサーのエルドリッジ・クリーバーの言葉にちなんだ「『アブレ者』マニフェスト」が読み上げられ、前段集会を締めくくった。

午後１時、CIC前広場から富山駅前の大通りの４１号線へと移動。スピーカーから音楽を流す街宣車の前に並び、横断幕を先頭に、富山市中心部の路上でのデモ・街頭アピールを開始した。「飢えたる者に食べさせろ、条件つけずに食べさせろ！」や、「すべての者に無条件で基本所得を給付せよ」、「資本家・政治家どもよ、百年に一度の大失敗の責任を取って、みんな消え去れ、一人も残るな」といったスローガンを叫ぶ「路上会合」の参加者の声が、富山市中心部の街頭に響いた。それらのスローガンの合間にマイクが回され、何人もの参加者が街頭で自由に自分が言いたいことを訴えた。その中で、童謡の節で麻生総理批判の替え歌が披露されたり、「元法務大臣として死刑を執行してきたN・Jを今度の衆議院選挙で落選させよう！」、「派遣労働者の切り捨てを止めろ！」、「自衛隊のソマリア沖派遣反対！自衛隊に守られる権利ではなく、生存権の行使の保障を！」などのアピールが次々と出されていった。中には、病院の利益につながらない長期入院の瀕死の患者を強制的に退院させて家族に押しつけるような、現在の福祉・医療への疑問を切々と訴える参加者もいた。

また、スローガンや参加者からのアピールと併せて、「路上会合」のデモ・街頭アピールでは、自分たちで作詞・作曲した「アブレ者のマーチ」や、行進曲風のブラスバンド曲、大槻ケンジの「労働者M」等の音楽を賑やかにスピーカーから流し

た。０７年の「『もうたくさんだ！大行進』では、生きがたさに追いやられた自分たちがネズミとして、人間を生かさないこの世の闇を食い破るという内容の「ネズミ組参上！」という歌をテーマソングとして流したが、今回のデモ・街頭アピールではその歌も街宣車のスピーカから流した。

残念ながら、当日のデモコースは、交通の妨害になるということで、富山市内で一番人通りのある大通りに入ることを規制されたため、途中、一度、細い通りに入ってから、再び市電の軌道に沿って中心部に入るコースを取ることになった。その際に、河合音楽教室のピアノ講師の「雇い止め」への抗議を福岡のフリーター労組から呼びかけられていたこともあり、市電通りにある富山の河合のビルの前で、「音楽教室の講師の雇い止めを止めて、雇用を保障しろ！」の声を上げるという場面もあった。１時間余りデモ・街頭アピールを行った後、富山第一銀行前で解散した。

（「生・労働・運動ネット　レポート」　2009.8）

３.「路上会合」を今後のアクションの展開へのステップに
孤立無援状態を共に突破する「快感」を街頭で表現したい

「路上会合」からほぼ３週間後の６月１４日の「アンラーニング０９」の第２回の学習会では、「自由と生存のメーデー０９」の報告と併せて、当日撮影した映像を見ながら、「路上会合」を振り返ることを行った。「路上会合」を企画した自分たちの側の思いとしては、自らの声を富山の街頭で元気よく響かせたというイメージを持っていたのだが、ほとんど通行人もいない富山の大通りを小さなデモ隊が行くという「路上会合」の実際の映像との落差に多少の落胆もないわけではなかった。しかし、そうではあれ、この富山の地でともかく３０人余りの人たちと、今、「自壊」しつつあるネオリベ・グローバル資本主義と、それを強行してきた資本家／政治家連中に対して「みんな消え去れ、一人も残るな」という声をつきつけることの「解放感」はまちがいなく参加者同士で共有されていたように感じている。問題は、むしろその「解放感」を出発点として、今後、私・たちがどこに向かおうとするのかということではないかと思う。

そのことを考える上でのポイントの一つが、自分たちの街頭でのアクションに、

どのようにもっと「アクション性」や「パフォーマンス性」をもたせて、「楽しげ」なものに見せるかということでははないかと考えている。

現在、多少の程度の差はあれ、この国を生きる私・たちの大半が、路上生活者／「派遣切り」の当事者／正規雇用自体の「劣化」・縮減といった生の保障の破壊の「連続性」のいずれかに身を置くことを強いられている。しかし、そうした「連続性」を区切る境界線がより不明瞭になり、ますます多くの人々が「生」の困難に追い込まれるような状況になればなるほど、逆に、自分たちの隣にいる存在を、「アイツラは怠け者だ」、「社会に甘えている」と差別・排除して、自分がまだ社会の「メジャー」な側にいることをかろじて確認するという悲しむべき現状がある。そのように、自分の横にいて同じように生きがたさを抱える人たちを侮蔑・敵視することで、厳しい社会状況の中にいる自分を保つというあり方が、結局は孤立化と相互の分断、そして更なる生きがたさをもたらすことにしかならないことは、言うまでもないはずなのだが。

そうした閉塞的な状況に「風穴」を開けるためにも、私たちが街頭で共に声を上げようとする際に、人間の「生」を保障しない社会への憤りの表明と表裏一体のこととして、自分の生きがたさや孤立無援状態を他の人たちと共に突破する「快感」や、人間が互いにつながりあうことの「楽しさ」をどれだけアクションとして示すことができるかが、とても大事なことのように思う。そのような意味で、どれだけ「楽しげ」なものであるかということは、単に見せ方をどうするかということに止まらず、今、この国で何であれアクションを起こすことの根本に関わることではないかと考えている。

今回の私・たちの「路上会合」でのデモ・街頭アピールでは、街宣車から賑やかな音楽を流したり、人目をひく巨大パペットをかついでデモ行進する一方で、私・たちの体の「硬さ」や動きの悪さを、スローガンやアピールの言葉でカバーしようとしたという点で、折衷的なスタイルのものであったと思う。そこから更に、もっと「楽しげ」なものとして街頭アクションのスタイルを自分たちとしてどう創り出すかを考える上で、音楽や鳴り物の使い方や街頭でのパフォーマンスなど、各地でのインディーズ系メーデーから多々学ぶべきことがあるように感じている。

「衣・食・住」をめぐる相互扶助の「アクション化」を！

今回の「路上会合」のデモ・街頭アピールでは、「市役所食堂の無料化」や「空いている公共施設の無料住宅としての開放」を要求として掲げたのだが、そのように、人が生きることは本来タダであるべきだということを、今後、更にどのようにアクションとして展開できるかが重要なことではないかと考えている。

私たちの「『アブレ者』マニフェスト」の元となったのが、アメリカの黒人解放組織・ブラックパンサーの、「人民の要求に応えて」という有名な文書である。ブラックパンサー党では、警官による人種差別的な暴力・虐待からコミュニティーを守るための地域防衛組織による「逆パトロール」活動と同時に、のべ１万人の子どもたちに無料で朝食を提供した「無料朝食プログラム」や、無料で医療サービスを提供した「人民病院」等の活動を展開した。また、ヨーロッパでのスクウォティング運動では、占拠した建物の「自主管理」や、文化・政治運動の「拠点化」と並行して、近隣の食料店から無料で提供を受けた食材や、時には廃棄された材料を使った「オープンキッチン」での共同炊飯・共食が運動の要になっている。

私・たちは、今年５月から、「グローバル経済の破綻は私たちの失敗ではない――『今のようではない生』の創造への〈鍵〉をさぐる」をテーマとして、「アンラーニングプロジェクト０９」をスタートさせている（〈補註・Ⅱ〉）。今年度の「アンラーンニング」では、この国を生きる私・たちに否応なく強いられる「生」の困難を、その困難を私・たちに強いる資本主義それ自体を「具体的に見限る」ことへとどのように転化させるのか、またそのためにも、市場経済の外での「生」の創造のための仕組みをいかに私・たち自身の手で生み出しうるのかを考えあうことを試みている。

そのような意味でも、アクションということを街頭を「歩く」ことや街頭パフォーマンスということだけに限定せずに、「保障されざる者」同士の「衣・食・住」をめぐる相互扶助としてどのようにアクション化できるのかということが、人間の生の保障の破壊・剥奪を進めてきたネオリベ・グローバル資本主義を私たちが「具体的に見限る」ための一つの手がかりになるのではないかと考えている。

私・たちの「路上会合」は時期的にその最後の方に位置するものであるが、今年４月初めから５月末にかけて、北は北海道・北見から南は九州の福岡や熊本まで、

この国の十数カ所でインディーズメーデーが繰り広げられた。今回、富山からも参加した「自由と生存のメーデー０９」には、韓国の「フリーター」・「無職者」運動の当事者も加わっていたが、その事前集会では、今年初めて韓国で行われた不安定雇用労働者・「フリーター」たちのメーデーの映像も紹介されていて、「保障されざる者」たち同士の国境を越えた結合が生まれつつあることを感じさせた。

「路上会合」それ自体は参加者が３０人程度の小さなものでしかなかったが、今回、「路上会合」を企画したことで、全国的な規模では数千人、目を国境の外に転じて、韓国でのインディーズメーデーやヨーロッパの２０もの都市で開催された「ユーロメーデー」の参加者までも含めれば数十万人規模の人々の動きの中に連なることができたのではないかと、手前勝手ながら「自負」している。

富山市も全国各地の地方都市と同様に、この十数年、都市の郊外化に伴う中心街の衰退が著しく、実際のところ、私・たちの「路上会合」がどれくらいの人たちの目にとまったのかも大いに怪しい。しかし、それでも、富山の街頭で、ネオリベ・グローバル経済やそれを強行してきた者たちに対して、「みんな消え去れ、一人も残るな」の声を響かせた「快感」・「解放感」は、それから約２ヶ月後の現在も完全に消えたわけではない。　今回の「路上会合」を一つのステップとして、人間を単なる利潤追求のための「資源」や「消耗品」として酷使・廃棄して顧みないこの世界のあり方に対抗しうる社会的な結合や、私たちの「自律」と「生存」を支える相互扶助への試みを積み重ねることで、「今のようではない生」への創造への機運を高めていくことの一翼を担っていきたいと思う。

（「生・労働・運動ネット　レポート」　2009.8）

〈前註・3〉

一歩前に　UNDERCLASS　WARの方へ

ⅶ. 2016年：アンダークラスは〈横謀〉する

●　呼びかけ

『狼煙』をあげよう！

この列島における私・たちの歴史、それは、絶えず名付けられる（ 他称される）歴史であった。― 遠くは「困民」・「貧民」・「窮民」・「細民」というように、近くは「日雇い」・「フリーター」・「ワーキングプアー」・「野宿者・ホームレス」・「生活困窮者」というように。

これまでの私・たちの歴史のなかで、私・たちは、 遠くは「無産の民」・「下層労働者」と、近くは「フリーター」・「プレカリアート」と名付け返そう（自称しよう）としてもきた。

しかし、もはや列島社会が、それを宰領する国家・資本家階級が、私・たちの「労働力」を「搾取」する閾を超えて、まさに私・たちの〈身体〉 を「植民地」化した「奴隷」として「収奪」し続けるこの時、私・たちは一切の他称をはねのけ、「アンダークラス」の自称のもとに立ち上がり、国家・資本家階級との階級戦へ向けて横に集い合う『狼煙』をあげる。

この社会の根底を担いながら、この社会の最底、「板子一枚」を踏み抜けば「奈落」へいたる最底の境位を生きる私・たち。この私・たちの〈解放〉はこの社会の全面的変革なくしてありえず、この社会の全面的変革なくして、私・たちの〈解放〉はありえない。

さあ、『狼煙』をあげよう。私・たちは「ここにいる（プレセンテ）」！

● 〈横謀〉の試み

本日は　呼びかけに応じ、遠いところから駆けつけていただいてありがとうございます。みなさんとともに、今日、明日と「NO WAR, BUT UNDERCLASS WAR!　アンダークラスは〈横謀〉する！　ON THE STREET ／ IN THE NIGHT」と題した時間を共有していきたいと思います。これから、みなさんと一緒に「新しい」時間を作り出していくことに挑戦していくのだと思うと、本当に胸が高鳴る思いです。

今、この日本社会には大きな分断線が走っており、その分断線がつくる亀裂の下に、多くの人々が落とし込まれ、うずめこまれようとしています。しかし、昨年の夏からの「安保法案反対運動」は、これらの人々の「声」とつながるどころか全く絶ち切れてしまっていました。結局のところ、その「総がかり」という運動の「構成」は、「野党の野合」にそのまま流しこまれていっただけです。このような「総がかり」というような「構成」しか作り出せないありかたに強い怒りを感じるとともに、そういう「構成」の在り方を突き崩せない自分たち自身にたいしても、焦りと怒りを感じています。

こんなことをやっていても何にも変わりません。この列島に走る分断線を、下からぶちこわす、政治を成り立たせている舞台そのものを根底的にひっくり返す。そうです、まさにちゃぶ台返しです。そういうことがあっちでも、こっちでも起きない限り、今の日本は変わらない。この閉塞感ばかりの状況を、突破したい、突き破って暴れたい。この列島を差配している支配階級とその国家に対峙する力を、何としても創りだしていきたい。そのために、この列島社会を根底から変革する「主体」としての、集団的なひとつの「社会階級」の「顔」を持ちたいのです。〈アンダークラス〉という「顔」を。それはどのようにしたら可能になるのか。今日、明日の試みを通して、そんなことにまで踏み込んで考え合えたらとわくわくしています。

限られた時間ですが、この列島の未来に向けて思っていることを、それぞれ

が存分に出し合えたらと思います。そして今後も、このような集いを担おうとするものたちが、お互いに「横」につながりあいながら、「アンダークラス・プレセンテ！」の声を、今回はここで、次はあそこでというふうに、上げあうことを目指していきましょう。
　さあ、〈声〉をあげよう。「私・たちはここにいる、〈アンダークラス・プレセンテ〉！」　さあ、はじめよう！　星空の〈横謀〉を！

・不安定労働者組合の旗を立て、自らも日雇い派遣労働者として「アンダークラス」の階級構成を志向する者・たちと、方法的に「アンダークラス」と自称していくことで階級的結合を目指す者・たち（＝本日のホスト役を務めるわたし・たち）。そして、「在日」朝鮮人として戦後日本社会に括りつけの脱植民地化回避システムに抗い生きる者・たち、彼ら／彼女らと接合して「反日」を生きる者・たち・・・さらに明治・大正期のアナキズム研究の視点から、現代人に「今こそアナキストたれ」と焚きつける栗原さん。それぞれが各々の生・労働・運動の現状と課題を語り、お互いに「よそもんの口出し」を行った。
・しかし、この初めての試み「星空の／屋根の下の〈横謀〉」は、かなり難しい議論を含んでいた。今回ホスト役であったわたし・たちは、なぜ「アンダークラス」という階級を自称することが今必要なのかを、この場で十分に展開できたわけではない。

・さらに、「在日」の人たちと「アンダークラス」がどのように接続するのかという問題も、大きな課題として残った。雑誌「悍」４号（2010年5月）に掲載された、「小野俊彦と崔真碩の往復書簡　名乗りから始まるもの―異族たちの出会う広場はどこに？」の最後の一行で崔真碩さんが行きついた「フリーターを名乗る役者と朝鮮人を名乗る役者が出会う広場、そこで何が起こりうるのか」という一言、そこで提起された問題を、わたし・たちは前に動かすことができず、今もそのまま課題として残している。
・栗原さんは、論議の最後を以下のようにまとめてくれた。―「現代のアナキストとしては、「アンダークラス」という「階級」を今持ち出すことには慎重にならざるを得ないところがある。しかし、かつて船本洲治が日雇いの「在日」の人々やルンペンプロレタリアートを「流動的下層労働者」と名付け返したように、貼られているレッテルを、自分たちで名乗ることが力を発揮するということがあるのは間違いない。それが「抑圧状況そのものを武器にする」ということではないか。その意味で「アンダークラス」を自称し返すことの意義は大きい。そのようにして横に繋がることは有意義だとも思う。しかしそこは、むやみに急がず、お互いの違いをは

っきりさせながら、しかるべき時にはお互いがお互いを求め合えるという関係を築いておくことが、今は必要なのではないか。」

・論議は先端レベルでは、残念ながら踏み込んで議論を進めるまでには至らなかった。しかし、例えば、「週５日はきついんだよね。できれば週４日に抑えて働きたい」と話す「在日」の人たちと、「稼いだ金から税金を取られて、その税金で国家が原発や武器を買うことには我慢できないから、自分はパチプロになってやれと思った」と語る「反日」を生きる「日本人」の間には、同じ雰囲気＝「アンダークラス」を軽々と自称し返すことができそうな若さやしなやかさが感じられた。彼らは、「アンダークラス」と「在日」の両者の接合を体現しているのかもしれないと感じられた。

議論の内容的にはまだまだ不十分であり、問題提起で終わった今回の〈横謀〉だったのだが、来年以降もホスト役を別の地域に移して、そこでまたアクションをして、この〈横謀〉を続けて行きたい。その中で、さらにじっくりと議論を深めていきたいと考えている。

●　栗原さんの「米騒動」論
――「生の拡充」の集団的実践としての「米騒動」――

いよいよ「真打ち」の栗原康さんの登場となった。栗原さんは大杉栄や大正期のアナキズム運動の研究者だが、栗原さんにとってアナキズムとは何かと言えば、「いかなる支配もない状態を求める運動思想」であるとともに、「金を稼ぐことができない奴はダメだ」といった、人間はこうあるべきだという「尺度」や価値観の強制にも反対するということだ。それは、一言で言えば、「やりたいことしかやりたくない」ということに他ならない。同時に、そこには「喜び」の情動の全面的な肯定があり、思う存分、やりたいことをやってみることで、自分が思ってもみなかったことができるようになる中で、自分の心や体が変化していく。それを大杉栄は、「生の拡充」と呼んでいる。そうした「喜び」の情動の肯定や「生の拡充」ということをキイワードとして、大杉栄が遭遇した大阪での「米騒動」や彼の「米騒動」観、また、「米騒動」が後の大杉や伊藤野枝の運動論にどのような影響を与えたかということが、「白昼の〈横謀〉」での栗原さんの話の大きなテーマとなっていた。

この話術はタダものではない―栗原康さん

1918年の「米騒動」というと、とりわけ、その発祥の地である富山では、魚津や水橋、滑川と

いった富山湾岸沿いの小都市の貧しい女性たちが、無軌道な破壊や暴力行為に訴えることなく、米の値段の急激な高騰に抗議して、集団で米の県外移送を阻止したり、米の安売りを求めたりしたといった「女一揆」のイメージが強い。しかし、栗原さんによれば、実際には、それは、そうしたイメージを遙かに超えるものであり、むしろ、ＩＭＦによる「緊縮財政」政策の強制による増税や年金減額等に反対して、ギリシャ・アテネの街頭で抗議者がグローバル企業のビルのガラスを叩き割ったり、自動車をひっくり返して燃やしたりするといった暴動の光景を思い浮かべる方が相応しいようなものだった。1918年の「米騒動」というのは、日本の歴史上で最大の暴動であり、警察のひかえめな発表でも70～80万人、研究者によっては、500万人から一千万人ぐらいの人々がそこに参加したと言われている。当時の日本の人口が約六千万人なので、最大、日本の人口のおよそ6人に1人がそこに加わったという計算になる。

各地の「米騒動」というのはそれぞれに特徴があって面白いのだが、その中でも、一番勢いがあったのが、1918年の8月9日からの数日間、最も激しく展開された大阪の「米騒動」だったと言われている。当時、東京にいた他の活動家たちは、「米騒動」が全国各地で激化すると「予防拘束」されて身動きが取れなくされてしまったが、大杉栄は非常に幸運なことに大阪の「米騒動」を直接目撃している。それは、実はある失敗による偶然の産物だった。

「葉山日陰茶屋事件」後の原稿依頼の激減と大杉たちが編集する雑誌の相次ぐ発売禁止による収入減の中で、大杉は、生活資金を得るための手段として、親友の林倭衛(はやししずえ)という画家の絵を伊藤野枝のおじで実業家の代準介に売ることを思いつき、彼女の故郷の九州まで行った。しかし、結局、1枚も絵を売ることができないまま、帰りの汽車代もない状態で野枝の実家で1月余り過ごした後、大杉の不在に焦った同士たちがカンパして送ってくれたお金で大杉はようやく東京に戻ることができた。

その途中、「借家人同盟」の主導者の逸見直造といった大阪在住の運動家との交流のために大杉が大阪駅で下車した日が、偶然にも大阪で初めて「米騒動」が起きた日だった。そこで、大杉は、大阪の運動家に案内してもらって日本橋界隈を歩き回ったのだが、主婦である女性たちが集団で米屋に押しかけて「米、出せや！」と言って店主とやりあっていたり、奥の方に逃げていた米屋の店主が店頭に出てくると、「何て因業な親父や！」と叫び回っていたりする姿を目撃している。また、当時の新聞によると、集団で押しかけても店の戸を開こうといない米屋に対して、どこからともなく丸太が出てきて、「ワッショイ、ワッショイ」と叫びながら戸を押し破って、米をまき散らすということもあったようだ。

「米騒動」の起きた原因として、米が短期間で急激に値上がりして、庶民の稼ぐお金では買えないような値段になってしまったということがあるが、「米騒動」では、集団で米屋に押しかけて、自分たちの収入で買えるような値段で売るための自主的な値引き交渉を米屋と行ったり、安い値

段で米を販売する「廉売所」を米屋の店頭で開かせるということがあった。さらに「米騒動」が激しくなると、払える値段で米を買うということを超えて、群衆が米をただで持って行くということも大杉は目撃している。その時に大杉を案内していた逸見直造の息子の逸見吉三によると、大杉はすっかりテンションが上がっていて、その辺を歩いているおかみさんたちを見かけると、「あそこで米の廉売をしているぞ」と言って煽るようなことをしながら、午前1時頃まで歩き回っていたそうだ。大杉を尾行していた警察側の記録によると、大杉は、「窮民が米を奪取するのは当然のことなり」と叫んでいたそうだが、最後には警察も疲れ果てたのか、警察署長が「大杉さん、そろそろお帰りになったら」と言うので、ようやく大阪の同志の家に引き上げたということがあったようだ。

次の日も、興奮がまださめやらぬ中で大杉は下町を歩き回ったが、井戸端で話しているおかみさんたちの様子に不穏な気配を感じて、タクシーを呼んで何人かの運動家たちと一緒に大阪の全ての新聞社を訪ねて、「釜ヶ崎の主婦たちが暴動を起こすぞ」とデマを言って廻るということをした。それはあくまでも大杉のデマだったのだが、その日の夜に本当に釜ヶ崎で暴動が起きているそうだ。実際に大杉のデマで「米騒動」が起きたかは定かではないが、その日は大阪の「米騒動」が頂点に達した日で、当時の大阪には長谷米店という大きな米屋があったが、そこに押し寄せた人々と店主との、「米を安く売らなければ、店に火を付けるぞ」、「やれるものなら、やってみなはれ」というやり取りの中で、激昂した群衆が実際に店に火を付けて炎上させるということがあった。

しかも、消防隊がホースで水をかけて消火活動をしようとすることを群衆が立ちふさがって妨害したり、野次馬の中にいた男が日本刀を家に取りに行って消火ホースを切断したりした。

また、大阪の「米騒動」では、群衆の中に「竹槍部隊」が登場して警察と互角に闘うという場面もあったそうだ。最後には警察では手が付けられないということで、騎馬の軍隊までが出動してようやく群衆がその場から退散した。しかし、それで終わらないのが大阪の「米騒動」のすごいところで、警察の出動で誰もいない交番を大阪中で群衆が引き倒したり、繁華街のショウウインドーをたたき壊したりして暴れ回った。一説によると、その日の大阪だけで約50万人もの人たちが「米騒動」に参加したそうだ。大阪の新聞社を廻った後、大杉は、これで自分の役目は果たしたということで、京都の活動家との交流のために京都の料亭に行って遊んでいたので、翌日に大阪に戻ったときにいろいろと聞いているとは思うが、その日の夜の大阪の「米騒動」を直接には見ていない。

それでは、大杉栄は、「米騒動」についてどのように考えていたかということだが、残念ながら「米騒動」について大杉が直接論じている文章はほとんどない。それは一つには、「米騒動」を煽

ったと思われることで権力側から弾圧されることを恐れた、ということはあるだろう。ただ、東京での「米騒動記念茶話会」で、大杉は「米騒動」について、「とにかく愉快だった」と言っている。

そうではあるが、大杉の「米騒動」論ではないかと言われているものが２つあって、一つは、「泥棒と町奴」、もう一つは、「此の酔い心地だけは」といういずれもごく短い文章だ。「泥棒と町奴」という文章で、大杉は、幕末の歌舞伎作者の河竹黙阿弥が、市井の庶民が何かのきっかけで働くことが馬鹿らしくなり、仕事道具を投げ捨てて泥棒になってでも生き延びようとする姿を芝居の中の鼠小僧次郎吉や鋳掛屋松という主人公として描いていることへの共感を示している。「泥棒と町奴」は、他人の名前で、ある雑誌に発表されたものなので、本当に大杉が書いたものか疑問をもつ人もいるが、栗原さんによれば、そのように、人が自ら拘束をかなぐり捨てて変わっていく瞬間を手放してはならないという主張には、間違いなく、大杉自身の「米騒動」の体験が反映されているのではないかということだった。

大杉が「米騒動」について触れたと言われるもう一つのものが「此の酔い心地だけは」という文章だが、実は、以前の大杉栄全集では、雑多な文章を集めた最後の巻の中にまとめて収録されていたので、栗原さん自身も最初、その文章と「米騒動」を結びつけて考えていなかったそうだ。しかし、年代順に大杉の著作を配置した新しい全集では、1918年9月という執筆の年・月が書かれていて、時期的に合うし、その内容からも明らかに大杉が「米騒動」を意識して書いたものではないかということだった。その中で、大杉は、それまで「他の彼らに巧みにおおいかぶせられた幾重もの殻につつまれていた」民衆が、「叫喚、怒号」の中で、殻を取り払った「中身だけの彼ら」になり、「彼ら自身の魂を爆発させる」と述べている。そうした「短い酔」の後、民衆が「彼ら自身じゃない彼らに帰るだろう」と書いた後で、大杉は、「しかし、彼らが彼ら自身に酔った此の酔い心地だけは･･･」という言葉で、その文章を締めくくっている。

大杉の言う「幾重もの殻」というのは、「労働者」や「消費者」、「国民」といった、資本主義経済下で近代国民国家が人々に押しつけるアイデンティティのことだ、と捉えてもいいだろう。そうした自分ではない「殻」をかぶせられながら、それを本当の自分だと思い込まされるという仕組みが多くの人々の目にはっきりと見えたのが、「大正」という時代だった。つまり、資本主義的な貨幣経済が人々の日常生活の中に一挙に入ってくるのが明治末から「大正」にかけての時期だが、その結果、労働者や勤め人として雇われて賃労働で生活するというライフスタイルが一般的になるのが、大正という時代だった。そのような状況の中で、「金を稼ぐことができないのはダメな奴だ」と言われるようになるし、一方、女性たちはそうして夫が稼いだ金でより良い物を買う賢い「消費者」や、良い「主婦」になることを求められるようになる。

その文章の中の「Wah！Wah！Wah！Bara－bara！Gara－gara！Doshin！」という「叫喚、

怒号」は、「米騒動」での民衆の叫び声や、米屋の店舗やショウウインドーのガラスが破壊される音であると同時に、「米騒動」で直接行動を起こすことで、「労働者」や「良妻賢母」といった押しつけられたアイデンティティを民衆が自ら壊そうとすることを表すものでもあるだろう。また、「米騒動」の時期には、多少のお金があったとしても米さえ買えないということを逆手に取って、民衆が自分たちの「食」を自ら実力行使によって獲得することで、「金を稼がないのはダメな奴だ」といった資本主義的な価値観から自由になるとともに、自分たち自身の「力」を強く自覚したはずだ。その際に、口下手で店頭で米屋と渡り合えない男性に口達者な主婦たちが加勢して一緒に米の値引きを迫ったり、場合によっては、閉ざされた米屋の戸を見も知らぬ人たちと一緒に力を併せて丸太で壊して開けたりするようなことを民衆が集団で体験したということが、「米騒動」のすごいところだった。そうした意味で、大阪の「米騒動」では、「生の拡充」ということが数十万人規模で実践されたということになるが、どんなにつかの間のことではあっても、一度そうした感覚を味わったという「此の酔い心地だけ」はその後の日常の中で決して忘れないでいようというのが、大杉の一番訴えたかったことだろう。

● まとめにかえて

先に述べた「白昼の〈横謀〉」の前日の夕方の「路上表現」でのアピールでは、栗原さんも含めて何人もの参加者が、昨年の「国会前デモ」に象徴されるように、この間の運動が、怒りやアクションの直接性を失って、最終的に議会政治の枠内に回収されてしまうことへの疑問や違和感を表明していた。そのような運動のあり方は、大杉栄が「生の拡充」と呼ぶような、人々が「暴れる力」を取り戻して思う存分、やりたいことをやってみることで、自分たちの心や体が変化していくという契機を最初から忌避・抑圧しようとするものではないか。そうした自己抑制的な運動のスタイルでどれほど多くの参加者を集めようとも、結局は運動を「請願行動」の枠組みに止めようとするという意味で、それは、ある種の従順な「奴隷根性」に基づくものだとさえ言ってもいいのではないか。今回の栗原さんの話を通して、そのような問題点が改めて浮き彫りになったように思う。

富山の私・たちは、今年5月末から、「2016年度の課題」として、「『アンダークラスの階級構成』はいかに可能か」を大きなテーマとして討論の集いを営んでいるが、7月9日、10日の「アンダークラスは〈横謀〉する」の集いも、そうした流れから企画したものだ。栗原さんの話の前の「パフォーマンス」にもあるように、現実的には「アンダークラス」というのは、「不安定労働者」や「貧困女子」、「下流老人」、「貧困児童」といった簡単にはひとくくりにできないような存在としてこの社会の中にいる。そうした人々が「様々でありながら一つの顔」をもつ「アンダークラス」として自らを構成しようとする際に、かつての「米騒動」の時のように、支配の側によって

押しつけられる自分たちのあり方を解体し、そこからはみ出すということをいかに集団的な営み（私・たちはそれを「生のサンジカ」と呼び始めているが）として成立させるか、ということが重要な核としてあるのではないか。そのような意味で、現在の私・たちにとって、1918年の「米騒動」や、そこから「生の拡充」という言葉を生み出した大正期のアナキズムとは何だったのかという「問い」が、改めて大きな意味をもつようになっているのではないか、と思う。

今回の「アンダークラスは〈横謀〉する」のように、遠方からの参加者と一緒に街頭でアクションを行うことと併せて長時間の論議の場をもつという企画は、富山の私・たちにとって初めての試みだった。先に述べたように十分に議論を詰めることができなかった部分が残ったとはいえ、その企画を通じて運動的に充実した時間をもつことができたという意味で、私・たちのこれまでの運動スタイルから一歩違うところに出ることができたように感じている。再来年の2018年は、1918年の「米騒動」からちょうど100年目となるが、栗原さんの話の後の「フリートーク」でも、できれば、再び栗原さんを富山に迎えて、「『米騒動』から100年」をめぐって考え合う場をもちたいという話が、当日の参加者から出されていた。そのように、「『米騒動』から100年」となる2018年に向けて、そのことに孕まれている運動的・思想的な可能性を私・たちとして最大限取り出すとともに、「机上の論議」を超えてそのことをアクション性をもつものとして組み立てることに挑戦するということが、7月9日、10日の企画を行ったことの〈次〉へといかに踏み出すかを探る上で、一つの大きな柱になるのではないかと考えている。

以下は、「アンダークラスは〈横謀〉する！　ON THE STREET」に登場したラップ群からの〈引用〉である。

7・9　デモ『黙っちゃいなぜ！　ワタシ・ラ　下々の民』

チクショウ、チクショウ、チクショウ　オオオー（ラップ）

チクショウ、チクショウ、チクショウ、オー
チクショウ、チクショウ、チクショウ、オー
チクショウ、チクショウ、チクショウ、オウー　オオオー
「格差」なんて　言うな　ー　「不平等」だってちゃんと言えー
「格差」なんて　言うな　ー　「不平等」だってちゃんと言えー
チクショウ、チクショウ、チクショウ、オー
チクショウ、チクショウ、チクショウ、オウーオオオー
「支援」なんて　言うな　ー　「なま殺し」だってちゃんと言えー
「支援」なんて　言うな　ー　「なま殺し」だってちゃんと言えー
チクショウ、チクショウ、チクショウ、オー
チクショウ、チクショウ、チクショウ、オー
チクショウ、チクショウ、チクショウ、オウーオオオー

私・ら　下々の民は〈ゼロ〉を要求する！（ラップ）

「私・ら下々の民は〈ゼロ〉を要求する」
ゼロ　ゼロ　ゼロ　ゼロ／ゼロゼロゼロ！／ゼロゼロゼロ！
　防衛費ゼロ　米軍基地ゼロ　原発ゼロ　TPPゼロ
　待機児童ゼロ　待機老人もゼロ
　保育・教育・学費はどれも　　ゼロッ、ゼロゼロッ
　残業はゼロ　ブラック企業ゼロ
　不安定労働者の家賃はゼロッ、ゼロゼロッ
ゼロがいい　ゼロにしろ　ゼロがいい　ゼロにしろ!
ゼロがいい　ゼロにしろ　ゼロにしろ！ゼロにしろ! ゼロゼロゼロ！
　「自業自得」ゼロ　「自己責任」ゼロ　ひとりボッチゼロ
　〈ゼロ〉の社会にゃ自由がある　私・ら　らしく生きられる
　ゼロッ　ゼロゼロ　　ゼロゼロゼロ　　3、2、1、ゼロ　　ゼロゼロ
ゼロがいい　ゼロにしろ！　ゼロがいい　ゼロにしろ！
ゼロがいい　ゼロにしろ！　ゼロにしろ！ゼロゼロッゼロ
「私・ら下々の民は〈ゼロ〉を要求する」
ゼロ　ゼロ　ゼロ　ゼロ／ゼロゼロゼロ！／ゼロゼロゼロ！

♪ Ya　Basta　もうたくさんだ　♫　（ラップ）

Ya　Basta　　もうたくさんだ　　Ya　Basta　　やってらんないぜえ
Ya　Basta　　Ya　Basta
　タックスヘイブンに手え突っ込んで　　全部引き上げ取り戻せ
　隠した金は　世界中の　　貧しき民から奪ったもんだろ
Ya　Basta　　もうたくさんだ　　Ya　Basta　　やってらんないぜえ
Ya　Basta　　Ya　Basta
　子育て　何かと金かかるー　　老人介護も　金かかるー
　かせいで払って払って払って　　払えば借金増えるだけ
　待機児童を　ゼロにしろ　　待機老人　ゼロにしろ
　子育て・介護に賃金を　　生きてることに賃金を

Ya Basta　もうたくさんだ　Ya Basta　やってらんないぜえ
Ya Basta　Ya Basta

タックスヘイブンに手え突っ込んで　全部引き上げ取り戻せ
隠した金は　世の隅々　貧しき民から奪ったもんだろ　**Ya Basta**
奪われてンだから取り戻せ　ひっくり返せ　金返せ
奪われてンだから取り戻せ　ひっくり返せ　金返せ

Ya Basta　もうたくさんだ　Ya Basta　やってらんないぜえ
Ya Basta　Ya Basta　Ya Basta　Ya Basta　イエーイ！

（ZINE・10 「NO WAR, BUT UNDERCLASS WAR! アンダークラスは〈横謀〉する
ON THE STREET / IN THE NIGHT @ TOYAMA」2016・秋）

生・労働・運動ネット富山

2018・初夏

代表　埴野　謙二

〒930-0009 富山市神通町３－５－３
TEL：076-441-7843　Fax：076-444-6093
URL：http://net-jammers.net/
E-mail：jammers.net.tym@gmail.com